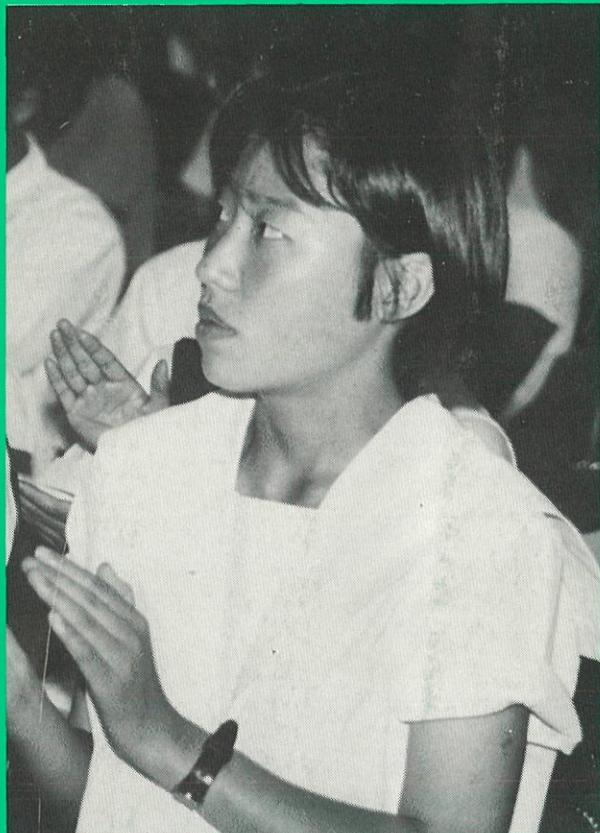


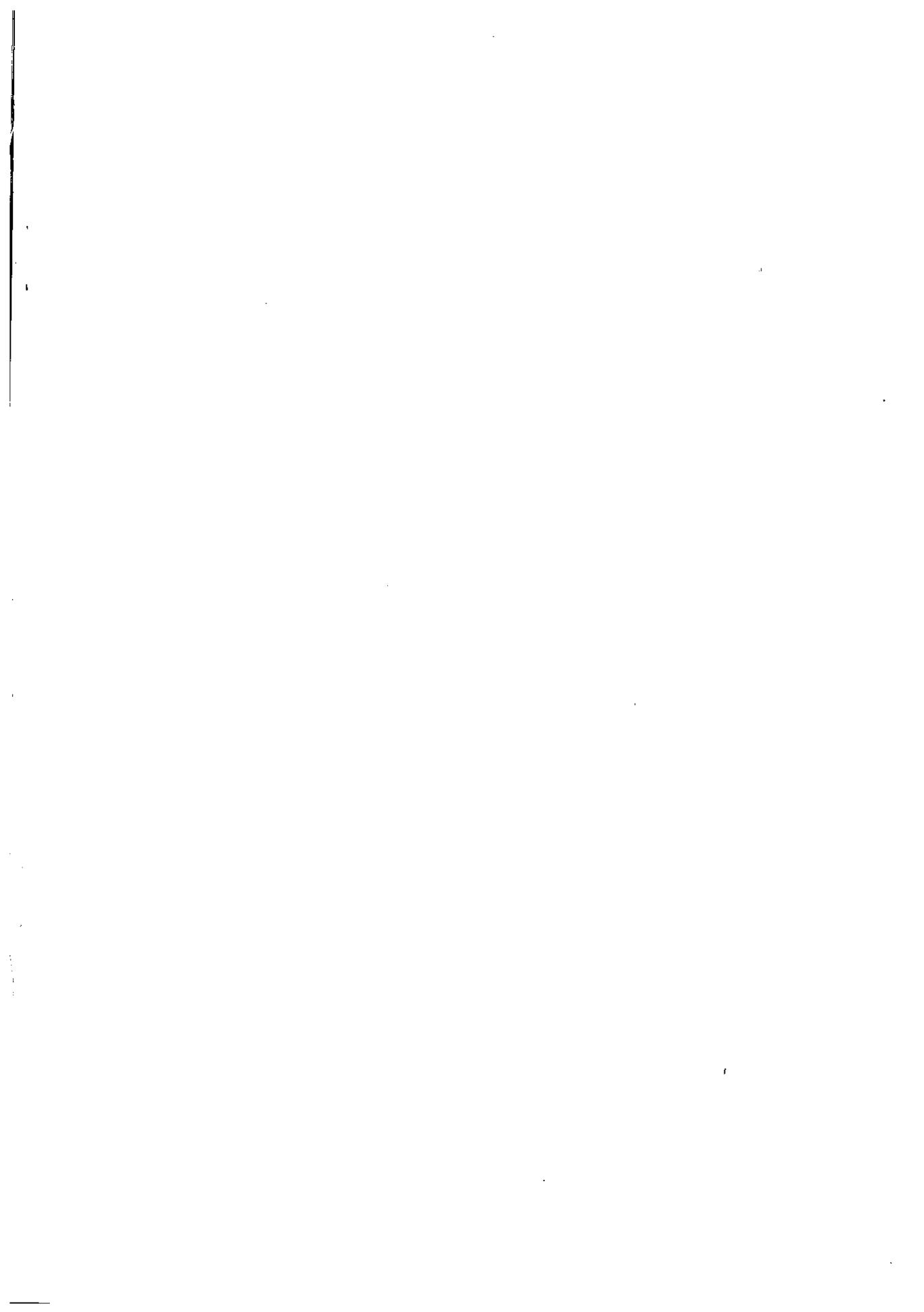
公立・私立の連携・協同で

新しい高校教育の創造を



93高校教育シンポジウムの記録
(1993. 11. 21~23／岡山市)

日本高等学校教職員組合
全国私立学校教職員組合連合





一九九三年度高校教育シンポジウムは、日高教と全国私教連の共催で、一月二二日から三日間の日程で、岡山市において開催されました。今回のシンポジウムでは全体会、分科会を通じて、今日高校教育が直面する課題や実践について討論・交流が深められました。

第一日目の全体会では、石井淳平日高教委員長、平形慎吾全国私教連委員長の二人が主催者あいさつ、内田喬岡山高教組委員長、小寺守岡山私教連委員長が開催県代表あいさつをおこないました。その後、北野庄次日高教教文部長が基調報告をおこないました。

次いで、高校教育研究委員会事務局長の太田政男氏（大東文化大学教授）が「高校再編の本質・現状とめざすべき高校教育改革の方向—『私たちの学校』の創造を—」と題する講演をおこないました。

その後、ふたつの特別報告がおこなわれ、私学フェスティバルの活動をするなかで成長する生徒たちが学校改革にとりくみはじめた愛知・聖靈高校と、平和学習をふかめ、朝鮮人強制連行・強制労働の調査活動を発展させて韓国を訪れ、南朝鮮の人たちと交流するなかで平和・国際連帯の意義を学びとっている高知の高校生のとりくみが紹介されました。

二日目からは分科会が開かれ、「特色ある学校づくり」問題と教育課程」「高校生の現状と教育実践課題」「自主的・自治的活動と憲法・平和教育」の三分科会にわかれ、討論・交流がおこなわれました。

閉会集会では、分科会報告と、仲本正夫全国私教連教文部長による集会のまとめがおこなわれました。

シンポジウムの参加者は一八〇名を上回りました。

目

次

主催者あいさつ

日高教中央執行委員長 石井 淳平……1

全国私教連中央執行委員長 平形 憲吾……3

開催県あいさつ

岡山高教組執行委員長 内田 留……4

岡山私教連執行委員長 小寺 守……6

基調報告

日高教教文部長 北野 庄次……7

講演

日高教教文部長 北野 庄次……7

「高校教育の本質・現状とめざすべき高校教育改革の方向」 —「私たちの学校」の創造を

大東文化大学教授 太田 政男……16

特別報告

◆「三大根拠地と結びついた学校改革にのりだす生徒たち」

愛知私教連

伊藤 秀雄……36

◆「地域から創造する高校生の国際交流」 —映画「渡り川」製作にかかわって

高知高教組

山下 正寿……41

第一分科会 「特色ある学校づくり」問題と教育課程

討論のまとめ

△報告▽

▽多様化にかかわって

大阪・古野 弘

50 46



第二分科会 高校生の現状と教育実践課題

討論のまとめ

△報告△

- ▽困難校の現状と教員の悩み
- ▽新学力観の克服 —職場ぐるみのわかる授業
- ▽教育現場での「新学力観」の克服
- ▽総合選抜制度のもとで育つ子どもたち

第三分科会 自主的・自治的活動と憲法・平和教育

討論のまとめ

△報告△

- ▽北海道における高校生の自主活動の現状と課題
- ▽学校の枠を超えた生徒の自主活動を育てるとりくみ
- ▽「子どもの権利条約」と校則の見直し
- ▽生徒の現状から出発した平和教育とは
- ▽高校生・地域・民族・交流・表現
—朝鮮人との交流と一〇年間の歩み

- | | | | |
|---------------------------|--------|----|----|
| ▽和歌山における総合学科について | 和歌山・茂野 | 和広 | 54 |
| ▽学校五日制とカリキュラム 一五日制は生徒とともに | 私学・森下 | 一期 | 58 |
| ▽新教育課程編成についてのとりくみ | 福島・白岩 | 孝一 | 64 |

- | | | |
|--------|----|----|
| 和歌山・茂野 | 和広 | 54 |
| 私学・森下 | 一期 | 58 |
| 福島・白岩 | 孝一 | 64 |

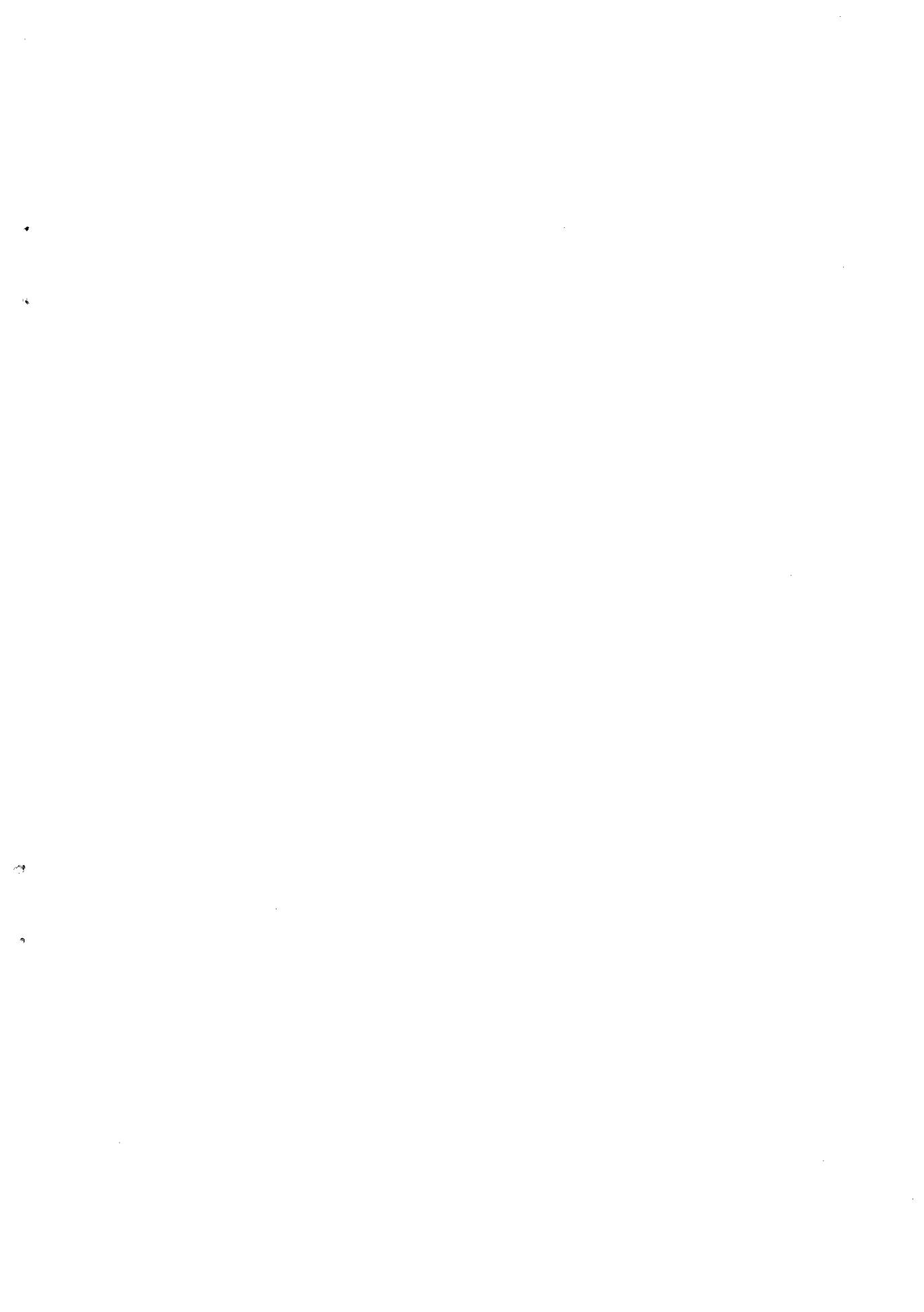
集会のまとめ

全国私教連教文部長

仲本 正夫

125

北海道・柴田 健一	98	91
京都・小野 英喜	78	
埼玉・畠井喜四郎	84	
兵庫・芦田 悅雄	87	
愛知・高橋 敏雄	73	
京都・小野 英喜	78	
埼玉・畠井喜四郎	84	
兵庫・芦田 悅雄	87	



父母・国民との共通理解を深め あるべき高校教育をめざすとりくみを

日高教中央執行委員長 石井淳平

年末確定をはじめとして小選挙区制や三千万署名など多忙を極める諸闘争のさなか、この岡山の地でシンポジウム開催にご尽力をいただいた地元岡山高教組ならびに岡山私教連のみなさんには、心からお礼を申し上げます。

昨年シンポジウムが神戸で開かれたのが一月二三日、あれからちょうど一年になります。そのとき日高教片山前委員長のあいさつの中に次のような一節があります。「長期にわたって自民党反動政治をあやつってきた最大派閥のドン金丸信を議員辞職に追い込んだ佐川疑惑・・・」と。あのとき一年後の二月一八日に、民主主義を覆す小選挙区比例代表並立制法案が、

自民党ではなく社会党をふくむ細川連立政権の手によつて衆議院を通過させられるなど、一体だれが予想し得たでしょうか。まさに「激変」そのものといえます。

時が時だけに少しだけこの点に触れたいと思います。法案が衆議院で採決を強行されたその夜、東京・日比谷野外音楽堂には六五〇〇人の人々が集まり、怒りの抗議デモは夜遅くまで

国会周辺に轟きました。それにしても九月以降の反対運動の盛り上がりは圧巻でした。わずか二カ月間でしたが反対署名は三六〇万をこえました。海部内閣のときの二倍です。地域の反対連絡会は一四〇〇近く結成されましたが、これは前回の五三〇箇所の二倍半にもあたります。日高教は署名にとりくみ、現時点で組合員数の七万をこえました。とりわけ強調したいのは、一一・一一全国高校組織による緊急中央行動です。これには日高教はもとより日教組や鶴町日高教金下の組織および中立を含む三五組織の賛同のもとに展開されるという、まさに歴史的なできごととなりました。

私たちのたたかいは自民党やとりわけ与党の社会党内部を大きく揺さぶっています。補正予算審議やコメ・消費税問題などとのからみで、マスコミ筋も年内成立に疑問を投げかけていますし、論調もかなり変化してきています。昨日付の毎日新聞は「何をいまさら」かもしれないがの断り書きで始まる政治部長の一文を載せ、この法案のもつ重大な問題点を指摘し厳しく

い批判をしています。衆議院とは政治環境を異にする参議院段階での法案阻止のたたかいは、大いに展望はあるしそのことに確信をもつことが重要です。さらに運動を強め、成立阻止にむけ全力を挙げようではありませんか。

さて「激変」といえば、昨年のシンポジウム以降高校教育をめぐって大きな動きがありました。それは高校再編、「多様化」、入試改革など高校教育に向けての集中攻撃の形を取つてあらわれています。それは文部省のいわゆる「三・二二通知」に端を発する高校入試改革に始まりました。主な内容は総合選抜はなしを含む学区の拡大、受験機会の複数化と推薦枠の拡大、受験科目の選択制や傾斜配転の導入、観点別学習状況の記録導入をふくむ調査書内容の改変など多岐にわたっています。茨城を皮切りに始まつた高校入試の改変は、九月にはほぼ全国で来年度の改変計画が明らかにされました。

また三月の文部省通知にもとづき来年度から国立一校と六県六校で総合学科の高校がスタートします。教育条件も未整備なまま、しかも学校間格差を放置した状況での導入は、全日制高校への単位制高校導入とあいまって、「多様化」による序列化をいつそうすめる「高校再編」につながることが予想されます。

このシンポジウムは、来年四月から新学習指導要領が高校で本格実施される直前に開かれています。七月に文部省から出された指導要録の改訂通知は、その一環として「新学力観」の徹底をねらつたものであり、すでに前倒し実施に入っているとはいえ、新学習指導要領について改めて討議を深め、意思統一をはかることが求められています。

政府・財界の要望する選別・差別・競争の教育を強める文部省の、とりわけ高校教育へ向けた集中的な攻撃のもとで、多くの父母・教職員の間に疑問や怒りが巻き起こり、共同のとりくみが前進しています。茨城では短期間に父母・教職員が力を合わせ部分的とはいえ入試改変の改善を勝ち取っています。佐賀・福島・大分では実施を一年延期させました。岡山では、総合選抜はすしの攻撃に対し、全国的に珍しい高教組と連合県教組との共同が実現し、父母と手をつなげたたかいが展開されています。

今年一月の全国教研で、日高教が発表した「高校教育改革への提言」は各地で話題を呼びましたが、各県組織で追求し作成されている「改革提言」と合わせ、わたしたちの願う高校像を示しつつ、父母・国民と共に理解を深めながらあるべき高校教育をめざしたとりくみをすすめることが重要です。

昨年から全国私教連との共催でこのシンポジウムが開催され、私学のみなさんと高校教育をめぐつてこのような交流の機会をもつことができるようになりました。これによって私たち公立教職員の学習と運動にさらに大きな広がりと力を得ることができます。心から感謝しているところです。またこのシンポジウムには、日教組、麿町日高教および中立の組織から計六組合の先生方がたくさん参加されています。心から歓迎しますとともに、一致する課題での共同をさらに発展させながら、子どもたちの明るい未来のためにともに力を合わせ奮闘しようではありませんか。

よりよい高校教育めざす公私共同のとりくみを

全国私教連中央執行委員長 平形慎吾

主催者の一人として私学の側から簡単に一言ごあいさつ申し上げます。

先ほどの石井委員長のごあいさつでもありましたように、小選挙区制をめぐる情勢が、衆議院での採決強行、参議院への送付という新たな重大な事態を迎えるなかでの開催となりました。が、この高校教育シンポジウムが日高教のみなさんと共に開催できるということは、今日的に大変重要な意義があると考えています。

それは、今日の高校教育をめぐって、公立高校入試制度の「多様化」「多元化」などをはじめ、全日制の単位制高校や総合学科の設置、そして、来春には、ついに宮崎で公立として初めて

の六年制中等学校が開校されるなど、高校教育の再編「多様化」

の攻撃が急速に強まっているなかでの開催であり、一方、私学

の側でも生徒減少期の「生き残り」をかけて、最近長野県佐久

高校で問題となつた予備校での授業を履修単位として認めるな

ど、目に余る「特進」路線の導入・強化や、千葉県鴨川第一高

校で表面化した経営者の腐敗・堕落、そして、業者テストと偏

差値廃止のなかでの大幅な推薦制の導入（東京では七七%の私

学が定員五〇%までの推薦制を導入）、業者テストへの会場貸

与などをはじめとした様々な対応など、私学の公共性、公教育

性とも関わる多くの問題が噴出しているなかでの開催だということです。

さらに、私が重要だと思うのは、こうした一連の問題が、その根っここのところでは競争の教育、競争原理によっていつそうあおられているということです。私は、昨年のシンポジウムでのあいさつのなかで、私私間の競争、公私間の競争、学校間の競争があおられ、それらを対立させ、相互離間をはかつていく攻撃についてふれたと思うのですが、それらの攻撃がいつそう激しいものとなつてきているように思うのです。

こうしたなかで、私たちは、だからこそといいますか、公私相互のおかれている様々な状況や問題点、課題などのついて、相互に、それぞれの立場に立つて知り合うこと、理解し合うことが非常に重要なになってきているように思うのです。

その上で、よりよい高校教育づくりにむけた共同のとりくみを強めることが、日本本当に重要になつていてると思うのです。

今回のシンポジウムが、そうしたことも含め、内容豊かに展開をされることを強く期待し、最後に、このシンポジウムを現地で心暖かく準備していただきました両教組のみなさんに心から感謝申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

小学区制・総選はずしの策動に抗して

岡山高教組執行委員長 内田喬

一九九三年度高校教育シンポジウムにご参加のみなさん、岡山の地へようこそおいで下さいました。心から歓迎申し上げます。

石井日高教委員長のごあいさつにもありましたが、小選挙区制粉碎のたたかいは、この岡山の地でも、急速に拡がっています。一月七日、全国闘争に呼応して、旭川原に一五〇〇人が結集し、悪天候の中意気高く市中デモを展開しました。また、県労会議傘下の組合をはじめ、宗教家、文化人などの呼びかけによる、「小選挙区比例代表並立制」に反対し、平和憲法を守る共同声明実行委員会、岡大職組など、あらゆる各層の労働組合、民主団体による集会、デモ、署名活動が全県的に連日のように行なわれています。三二の地域組織、八万を越える署名と、細川内閣による衆院ごり押し通過後も、いささかもひるむことなく、むしろ、ますます反撃ののろしは燃え広がっていることをまずご報告申し上げます。

さて、全国的な教育改悪の状況はこの岡山の地も同様であります。全国に誇りうる、普通科の小学区制・総選はずしの策動は、いよいよ具体化されることになりました。臨教審路線にも

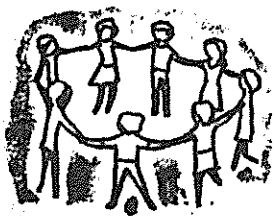
とづく、教育改悪の意図するものは、新たなる選別、差別教育の拡大・徹底であることはいうまでもありません。「効率」の名のもとに、まつとうな教育を願う国民からの収奪であることは明白であります。かつて、中曾根元首相が、「川上を変えれば、自然に川下は変わる」と豪語しましたが、大学解体、再編の動きは急速に拡がっています。先日、岡大職組の方々と共にシンポジウムを開きましたが、地元岡山大学も、大学審答申に沿いながら、いわゆる「地方大学の雄」として、生き残りをかけた解体・再編が激しいスピードで進行している報告がありました。その文脈の中で、小学区制・総選はずしの企図が進行している以上、当然、全県学区の超エリート高校を出現させることが、その目的であることは疑う余地もありません。

私たちは、高校の数だけ格差をつくり、その目的のためだけに、中・小学校教育を收れんしようとする、全面的な攻撃に対し、父母、県民、岡山私教連、高教組、県教組が一体となつて「はばたけ一五才岡山県民の会」を五月に結成し、本日もこの大雨の中、父母を中心に岡山最大の繁華街で、宣伝署名活動が、三時間にわたって展開されることになっています。

私教連、高教組、県教組と、置かれている状況や、上部団体の違いを越えて、子どもたちがいそいそと通える学校を、少しでもまつとうな教育をしたいと願う教師の良心を最大の共通項にして、協力・共同を強化して参りました。例えば、高教組からは、本集会の記念講演の講師である太田政男先生を、県教組からは総研の先生をお招きして共同の学習会を開くなど、お互いの立場を尊重し、地域組合も三者の共同で四カ所確立され、地域レベルでも学習会、宣伝行動もつぎつぎと展開されています。

親ならば誰しも、わが子にしつかりとした学力を、心身ともに健康に育ってほしいと願わないものはいません。あらゆる考え方や立場の違いを乗り越えて、共同の輪を幾重にも幾重にも拡げ、全県民運動に盛り上げていけることを願っています。

最後に、大変な悪天候の中、大変ごくろうさまです。岡山は、大変酒と魚と果物のおいしい地であります。二一世紀を担う若者をつくるために、豊かな教育の展望が、大きく拓ける学習討論がなされることを期待し、地元高教組を代表してのごあいさつとします。



父母・県民の願いにかなう民主的私学教育を

岡山私教連執行委員長 小寺 守

全国からお集まりのみなさん、苦労さまです。地元開催県であります岡山私教連から一言ごあいさつ申し上げます。

私たち私学の仲間も共催二年目ということで大きな期待をもつてこのシンポジウムを迎えました。岡山の私学でも生徒の減少期を迎えて、いろんな学園では「多様化」路線を先取りして、今ではほぼすべての学園で、いわゆる「特別コース」「特進」路線というものが出来上がっていきます。生き残りをかけて各学園がし烈なたかいをしていると言つてよいのではないかと思うわけです。学校五日制の問題でも、一・二の学園を除いてほぼ実施されています。完全に実施されている学園も一校あり、月二回実施されている学園もあります。しかしながら実施をする段階で安易な形で授業の上乗せをするとか、あるいは持ち時間は全然変えないという問題もあり、急いで解決をしていかなければならぬ問題も沢山あります。そういう激しい教育活動の中で、あるものは疲れはて、あるいは、また、やる気を失つてしまっています。

学校づくりへの展望が十分に持ち得ないというところに大きな問題があると思っております。さらに、今、検討されております入試制度の改変につきましても私学への影響も大変大きいということは間違ひありません。

私たちも組織の総力をあげて頑張る決意をのべてあいさつにかえさせていただきます。

最後に三〇〇〇万署名でありますけれども、私教連としても、

現在、最後の追い込みに入っている状況で、岡山では一〇〇万の目標をかけけています。

私たちも組織の総力をあげて頑張る決意をのべてあいさつにかえさせていただきます。

基調報告

日高教教文部長 北野庄次

この高校教育シンポジウムは、日高教と全国私教連が共催してひらく二回目の集会です。昨年の集会以降、教育をめぐるうべきはきわめて急激であり、しかも教育の理念・原則にかかる問題をともなつております。高校をふくむ教育は、こんにち、まさに重大な岐路に立たされています。

こうしたなかで公立・私学の教職員が一堂に会し、現状と問題点を明らかにし、実践を交流することは、大きな意義のあることです。

一、子ども・青年と教育の現状

1、子ども・青年たちの現状

- ① 「詰め込み」と競争、選別の教育のなかで
- ▽ 「学習＝暗記」の学習観

「月刊高校生」一〇月号に「徹底解明！高校生の言動四五の謎」と題する特集が組まれ、そのなかである生徒は、試験直前まで勉強をしない理由を、「テストの前に一気に詰め込まないと、頭のなかに残らない。記憶力のいい人とか、頭のできるいい人だつたらこつ

こつ詰め込んでも忘れないかも知れないけど、覚えた先から忘れていくような頭だつたら『覚えるのは無駄』」と述べています。

ある大学生は、「私の受けた高校教育というものは、授業の面では知識を詰め込むだけの授業であつて、学ぶことの楽しさなどといふものは全くといってよいくらいなく、つまらないものであつた」と語っていることが「高校のひろば」に紹介されています。

大学を頂点とする受験競争と詰め込み・選別の学習指導要領のもとで、子どもたちは暗記主義的な学習観を植えつけられ、学ぶ楽しさを味わうどころか、学ぶことに苦痛を感じている姿が浮かび上がつてきます。そればかりではありません。

- ▽ 「よく視界に入る人たち」にすぎないクラス仲間

先ほどの「月刊高校生」には、「一年間一緒にクラスで生活しているのに、なぜ『名前を知らない人、一度も話をしたことのない人』がいるのか？」という質問にたいして、ある生徒は、「よほどのことがない限り、特に無理して話す必要もない。一年間一緒にクラスで生活しているといったって、別にともに寝起きしているわけでもない。食事だって別である。強いていうなら、『授業中や休み時間に、

よく視界に入る人たち」にすぎない。でも、いてもいなくてもいい人たちではない。テストの平均点、正確に出ないから」と述べています。

いかに子どもたちが分断され、学校は、ともに学ぶなかで連帯し、自治の力をつけ、「人間の尊厳」について学ぶ、そして自らの誇りや自信がもてる子どもに育てるという大切な役割をはたせなくなっているかを示すものといえます。

②登校拒否・不登校、高校中退、学校を拒否する子どもたち

▽「登校拒否・不登校」は七万二千人に

こうしたなかで、登校拒否・不登校、高校中退、さらに、自殺や「いじめ死」事件が後を絶たないのではないかと思います。

八月に発表された文部省の報告によれば、「登校拒否・不登校」の児童生徒数は、七万二千人に達し、年々記録が塗り替えられる状況であります。

▽自殺した中学生が社会に突きつけたものは

少し古い話ですが、長野県で中学二年の女生徒が自殺をするというでき事がありました。その生徒は「学校なんて大きらい みんなで命を削るから」と、遺書を残していました。「教師なんて信用できません！あの人たちが教えてくれるのは、テストの点のとりかたや、本音と建て前の使い分けくらいです。持っているものは、人をはかるための巨大なものさし。私は気が狂いそうです。」と書かれていきました。

教育制度や社会の仕組みまでは見抜けないがゆえに、目の前の学

校と教職員にたいして痛切な批判と怒りの声をぶつけたものとも受け取れるのですが、それでも、ここまで追いつめられている子どもたちの苦しみは真剣に受けとめなければなりません。

③子どもたちが学校に求めているものは

▽学校とは、先生とは

最近、「山田洋次と夜間中学『下キュメント』が描く人間の幸せのための学校」というテレビ番組が放映されました。そのなかで、学校を拒否し、ある施設で学び、生活している若者が、「あなたにとつて学校とは？」と質問され、「学校とは自分のやりたいことが見つけられるところ、自分とは何かを考えられるところ」と答え、また、「先生とは？」との質問にたいしては、「それを励まし、助言してくれる人」というように答えていました。

今日の選別・差別の教育体制のもとで、傷つけられ、もがき、苦しみながらも、子どもたちは受験競争を緩和し、本物の学習、本物の教育を求めていることは、このことからもあきらかです。

こうした子どもたち・青年たちの願いに応える教育を実現するためには、教職員の協力・共同をひろげ、職場に民主主義を確立し、子どもたちの心をすたずたに切り裂く教育のおしつけを許さずたたかうこと、そして、子どもたち・青年たちの願いに寄り添って、父母・国民とともに教育のあり方を根本から立て直すことが、こんにち、切実に求められています。

2、教育の現状Ⅱ教育の再編、競争と選別の再編

①「偏差値追放・業者テスト禁止」（文部省）のねらい

▽茨城を頂点とした入試制度・調査書改変

政府・文部省、教育委員会がすすめている、高校「多様化」・入試制度改革は、こうした国民的な願いを真に向から踏みにじるものであります。

「偏差値追放・業者テスト禁止」の通知は、過酷な受験競争から子どもたちを解放するものではなく、「公的テスト」や学校外での「会場テスト」が幅をきかせ、塾産業は子どもたちの獲得に躍起となる、こうした事態がひろがっています。

そればかりか、「偏差値追放」は子どもたちの人格に関わることがらまで競争させることをねらうものです。それは、茨城を頂点とする、全国的な入試制度・調査書改変の実態が余すところなくあきらかにしています。

▽一元的偏差値競争から「ヨコ並びの学校選択」（棲み分け）競争）へ

文部省のねらいは、一元的偏差値競争・タテ並び競争から「ヨコ並びの学校選択」などと称して「競争原理」を再構築し、子どもたちを「棲み分け」競争へと駆り立てるにあります。

その攻撃は制度の面だけではなく、教育内容をもふくむ教育全体の解体・再編にむけられています。

②新学習指導要領・「新学力観」のおしつけと教育の解体・再編

▽「新学力観」とは

まず新学習指導要領・「新学力観」です。「新学力観」とは、「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力、基礎的・基本的な内容の重視、個を生かす教育」である、と説明されています。

しかし、第一に、「社会の変化に主体的に対応する能力」と述べていますが、「社会の変化」を創りだす主体は誰なのかが問われなければなりません。

全体の五〇%のシェアを占める東京書籍の中學「公民」の教科書は、憲法「前文」を紹介したあとに、その「前文」にもどづいて戦争放棄、武力不保持の第九条が設けられた、と昨年までは記述していましたが、新学習指導要領にもとづく今年の教科書は、憲法「前文」の精神を生かすために日米安保条約が結ばれ、極東地域の平和のために貢献している、と改められています。

改憲をねらう今日の政治反動のもとで、政府の政策に忠実な教科書がつくられていること事態、きわめて重大な問題ですが、ここで指摘したいことは、日本の将来は国家が決める、それに忠実に、「主体的に対応する」ことを子どもたちに迫る教育がめざされているということです。日の丸・君が代のおしつけや、ボランティア活動の強調は、そうしたねらいのあらわれです。

歴史を創り変えていくのは国民であり、教育の役割は、子どもたちがその事業に参加することのできるちからを育てることにあります。「新学力観」はこうした教育本来の役割を否定するものです。

第二に、「基礎・基本の重視」については、あの臨教審でさえ第

二次答申において、生涯学習体系への移行を前提にしながらも、基礎・基本を修得させることとしていましたが、「新学力観」のなかでは「修得」という言葉が削除されていてことに注目しなければなりません。

最初に「新学力観」を言いだした高岡浩二・文部省教育課程企画官は、「基礎・基本は、単に知識や技能だけではなく、思考・判断、学習意欲、そういうものの総体」などと語り、「関心・意欲・態度」を強調しています。それは、どの子にも基礎学力を身につけさせる教育を根本から覆すものです。

第三に、「個を生かす教育」ですが、それは、後ほど明らかにするように「個性まで競わせる教育」にはかなりません。

▽教職員の勤務実態とつよまる教職員管理統制の攻撃

「新学力観」がおしつけられ、「落ちこぼすまい」とすれば積み残し、積み残すまいとすれば落ちこぼす」という嘆きと、怒りの声が職場にあふれています。

「関心・意欲・態度」の評価が強調され、多くの教職員は、子どもたちに教科内容を学びとらせる時間をうばわれ、まるで子どもたちの監視役・チェックマンにすぎない教育活動がおしつけられています。

▽出回る「関心・意欲・態度」のテスト

「新学力観」を徹底するための研修や指定研究が強化され、意欲や関心、態度など、子どもたちの内面に関わることを点数化して評価する反教育的なことが、教職員におしつけられてきています。

「関心・意欲・態度」をみる市販テストが小・中学校に入り込み、茨城では、中間テストに「関心・意欲・態度」をみる問題が出題されるにいたっています。

「関心・意欲・態度」は、子どもたち自身が学習する内容を理解できるか否か、学習する内容にたいして「価値」を見いだすか否かに因る問題として重視されなければならないのであり、教育内容・学習内容を国家統制において、それにたいして意欲・態度を示せというのは人格まで国家統制するものです。

③高校教育における「履修・修得問題」

どの子にも基礎学力を身につける、このことを脇に置く「新学力観」は履修・修得のきりはなしなど高校教育にも徹底されようとしています。

これまでには、必修科目をはじめ、履修した教科・科目の修得を生徒に求め、学習したことを生徒がしっかりと身につけることを大切にしてきましたが、新学習指導要領のもとで、履修すれば「修得」を問わず、意欲・態度がよければそれでよし、といわんばかりの校長が現れはじめています。

一教科・科目でも修得できなければ原級留置や卒業を認めない、という現状は改められなければなりませんが、だからといって、すべての科目を修得の枠からはずし、「まじめに」履修して八〇単位さえとればよい、というのは基礎学力を身につける教育を否定し、態度主義を生徒たちに強要する最たるものです。

④学校五日制と学習指導要領の矛盾を「新学力観」で合理化

学校五日制の問題でも文部省は、学習指導要領との矛盾を「新学力観」で合理化しています。

この文部省の姿勢にたいして、学習指導要領の抜本的見直しを求める国民的な運動が大きくひろがり、現在、一八六の自治体で学習指導要領見直しの意見書が採択されるにいたっています。

二、高校教育の再編・「多様化」攻撃の現状

1、新たな段階を迎えた高校再編

①「二・二二通知」にもとづく高校入試制度の改変

△入試の多様化・選抜原理の多元化、多段階選抜

高校入試制度改変を求める「二・二二通知」が出されて以降、父母・県民の合意を得ないまま、はげしい勢いで、入試制度が改変されています。

改変される内容は、第一に、調査書と学力検査の扱い、学力検査の科目数、さらには、傾斜配点や選択問題の導入など、選抜方法を高校ごとに決めさせ、選抜方法が学校ごとに異なるものにされるとです。

選抜原理を多元化するねらいは、中学校の選択履修を拡大・定着させ、選別と競争の低年齢化をもたらし、中学校教育を再編することにあります。

また、高校を生徒急減期のなかでの「生き残り競争」に駆り立てることがねらわれていることも指摘しておかなければなりません。

第二は、多段階選抜・受験機会の複数化です。推薦入学はそのひとつです。

また、大分、佐賀では定員を一定の割合で二つに分け、前期、後期二回の選抜試験が一年後からを実施されようとしています。愛知の複合選抜とは方法は異なりますが、受験機会の複数化は、学校間格差を拡大するものであり、そしていわゆる「できる子」に有利な制度であることはいうまでもありません。

第三に、学区の拡大、隣接学区など他学区受験の導入・拡大です。

茨城では今年度八学区が五学区に拡大され、大分では一年後に一六学区が六学区に拡大されようとしています。東京では来年三月から二〇%の範囲で隣接学区受験が導入されることになっています。また、岡山、兵庫などでは小学区・総合選抜制への攻撃がいちだんと強められてきています。

高知では「進学校」といわれる追手前高校のみを全県学区にする案が検討されています。この例からも明らかのように、学区拡大、隣接学区受験の導入・拡大のねらいは、「学校選択の自由の拡大」などと子どもと父母・国民をあざむき、大学進学むけのエリート校をつくり、そのためには子どもたちをいつそう過酷な競争に駆り立てることがあります。

第四は、「新学力観」の定着をもねらった調査書の改訂です。

ここでの問題は、ひとつは、ボランティア活動などを選抜資料にする問題です。それは、ボランティア活動の精神を冒瀆するだけではなく、これまで批判されてきた「適格者主義」の精神にも反する学校教育以外の事柄が選抜資料にされる重大な問題です。

二つめは、「関心・意欲・態度」など観点別評価の導入です。

生徒の内面を点数化し評価するというおこなつてはならないことをおこない、それを入試選抜の資料として用いるのは、人権侵害といわねばなりません。

そして三つめにあげなければならないのは、調査書に観点別評価や特別活動の記録などを導入し、選抜資料として利用することは、中学が生徒の全生活を管理し、拘束する傾向を強めることになるという問題です。

以上のような重大な問題をはらむ入試制度の改変は、兵庫の尼崎、姫路地域に単位制学科を導入し、総合選抜制度を崩すことがあわせて企図されていることが象徴するように、高校再編と一体のものです。

②単位制高校・学科導入・拡大、「三・二二通知」にもとづく総合学科設置

▽高校教育の「複線化」をねらう

高校の「多様化」・再編のうごきは新たな段階をむかえています。産業構造再編のための労働力政策にもとづく職業学科の再編や、普通科への類型・コースの導入はひきつづき拡大されてきています。

それにくわえて、無学年・単位制をとる、これまでの高校とは教育のあり方が根本的に異なる単位制高校・学科の導入・拡大、そして「総合学科」が導入されようとしています。それは、高校制度を名実ともに複線化し、個性を生かすどころか、子どもたちの個性まで競わせ、選別するものであり、統一的高校像を解体するものといわなければなりません。

▽「総合学科」設置について

「総合学科」設置について、文部省の「三・二二通知」による指導が強化され、条件も十分整わないまま、来年度、六県・六校で開設されようとしています。

「目玉」とされてきた科目「産業社会と人間」にいたつては、教科書も準備されず、担当する教員は取得免許の粹をこえてだれでも教えられるとするなど、教科主義を否定し、免許法にも反するものといわねばなりません。その内容は、勤労意欲を強調し、ボランティア活動を導入するなど、企業に忠実な労働者養成をねらうものになっています。

導入されることになつた和歌山の高校では、その中身をつくりかえ生徒たちに学習権や進路選択の権利が保障できる教育を実現するために奮闘しています。しかし、現在検討中、もしくは今後検討する場合には、高校教育の理念と原則をふまえ、議論をつくすことが重要です。

③私学にたいする攻撃のつよまり

生徒減少期のなかで、公教育の役割をになう私学にたいする攻撃はきびしさをいつそう増しています。私学教育の独自性を変質させようとする攻撃、学校運営にたいする総務庁の行政監察・介入、さらには、「私学助成は憲法違反の疑いがある」とまで公言する財政面からの攻撃が強まっています。

財政問題でいえば、私学も公立もふくめ教育予算の抑制・国民へのしわ寄せの攻撃を、第三次行革審や財政審をつうじて新たにつけてきています。

また、私学経営者のなかには、「特進路線」を強化してきている学校があり、それは公立高校の受験体制の強化とともに、高校教育を大きくゆがめています。

④大学入試制度の多様化

その背景には、激化する大学受験競争と大学入試制度の問題があります。

一〇月に大学審が大学入試「改善」の報告を出しましたが、その内容は、「新学力観」のおしつけ、高等教育の「多様化」にあわせ、さらに、大学審路線にもとづく大学の個性化・「多様化」とも結びつけて、大学入試をいつそう多様化しようというものです。

2、高校再編攻撃の背景と財界の教育「要求」

以上のような高校再編攻撃の背景についてです。それは、経済団体連合会（経団連）が今年七月二〇日に出した、「新しい人間尊重の時代における構造改革と教育のあり方について」と題する報告を見ればあきらかです。

この経団連「報告」は、これから時代を「新しい人間尊重の時代」などと表現していますが、本文では「求められる人材像」という見出しを付けていることからも明らかのように、財界の労働力政策にみる教育「要求」を文部省などにせまつたものといえます。

- ①戦後の政治、行政、経済政策の総決算
- 経団連「報告」は、政治、行政、経済など「戦後政策の総決算を行わなければならない」と強調し、国際化と企業の多国籍化をすす

めること、そのために、「行革」・地方分権、規制緩和を徹底し、内閣総理大臣の権限強化を提言しています。

②経団連「報告」の「求められる人材像」

そして、「求められる人材像」として、「企業が求めてているのは、画一化された労働力ではなく、多様な人材」であると述べています。こうした人材を養成するためには、「偏差値競争は弊害」であると述べ、具体的な教育「要求」としては、「我が国産業の国際競争力を今後とも維持強化していくためには、創造性と独創性を必要とする基礎的な科学技術分野で貢献できる人材を育成することが急務」と述べ、さらに、「教える側に競争原理が働かないこと」は問題であるとしています。

こうした方向ですでに教育政策はすすめられているのですが、今までのやり方では手ぬるいと主張しているのです。

この経団連「報告」は高等教育の「改善」を中心に提言したものですが、教育全体を視野に入れていることはいまでもありません。今日の教育「改革」が子どもたちのためではなく、こうした財界の要求に応えるためのものである実態や、攻撃の本質を国民の前に、ひろく明らかにしていくことが重要です。

三、前進する父母・国民との共同の教育運動と奮闘する高校生

1、国民的教育運動の前進

こうした教育の反動的再編攻撃は国民との矛盾をふかめています。それは、この攻撃が「子どもの権利条約」の批准国が一五〇カ国をこえてひろがるなど人権の人類史的発展にそむくものであり、また、かつて経験したことのないような、国民的な教育運動が大きく前進してきています。教育運動の前進は、

(1) 学習指導要領の撤回・見直しのたたかいが広がり、その意見書は一八〇をうわまわる自治体であげられていること、

(2) 世界に類を見ない教育条件改善を求める署名運動は毎年二五〇〇万人の声を結集していること、

(3) 「入試改革大綱」を手直しさせた茨城のたたかいをはじめ、佐賀、大分、長野などでは入試改変を一年延期させていること、

などに現れています。これらの運動に共通するのは、子どもを真ん中にして、幼稚園から高校・大学、そして私学の教職員が協力・共同し、父母・県民としつかり手をとりあって運動をすすめていることです。

この観点をなによりも大切にし、いつそう運動を強化することが重要です。

2、高校生の奮闘

いっぽう、きびしい状況に置かれながらも、高校生がたくましく

成長し、自らの権利としての教育をとりもどす高校生の活動も積極的にとりくまれています。

愛知の高校生フェスティバル、私学高校生を中心としたサマーセミナーなどのとりくみが前進し、さらには、そうしたちからをバネに学校そのものをつくりかえていく運動に発展させています。また、平和学習、平和運動にとりくみ、韓国などと交流し、国際連帯の意義と重要性をじかに学びとっている岡山、高知などの高校生の姿があります。

学校のなかにおいても、文化祭をはじめとして、創造的な文化を創り出すとりくみが着実に前進しています。

四、今後の課題とシンポジウムのねらい・課題

1、高校教育シンポジウムともかかわる今後の課題は、つきのとりくみです。

(1) 憲法・教育基本法、「子どもの権利条約」を子育てと教育の基本にすることです。

* 幼稚園から大学までをとおした子ども観、教育観について、父母・国民をもふくめた対話・合意づくり

* 生徒の学校運営への参加をふくめ、「子どもの権利条約」を学校の場に具体化するとりくみ

* 「希望するすべての子どもたちに高校教育を」の合意づくり

の運動

* 完全学校五日制の実現、学習指導要領の抜本的見直しの運動

とそれにふさわしい教育課程の自主編成と授業の創造

*高校生の自主的・自治的活動の保障、促進

(2) 学習のあり方、授業のあり方を見直し、新たな創造をめざす」とです。

*「新学力観」の批判活動、および「履修・修得問題」についての検討

*教育内容・価値とも結びつけた、生徒たちが関心・意欲のもてる授業のあり方について検討・創造

*生徒の意志による選択履修の拡大・充実にむけた検討・工夫
公・私間の連携・共同をいつそうつよめることです。

2、高校教育シンポジウムのねらいと課題

(1) 以上のような今後の課題を視野に入れ、今シンポジウムにおいては、活発な討論・交流がはかられることを期待するものです。

(2) 分科会の課題

分科会は、

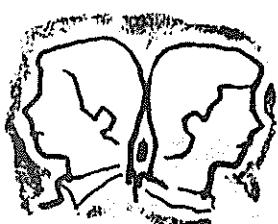
(一) 「特色ある学校づくり」、教育課程編成など、民主的高校教育を創造するとりくみとかかわって問題点・到達点をあきらかにする第一分科会、

(二) 入試改革・高校再編の実態、学校間格差、高校生の学力問題や学校ぎらいなど高校教育がかかえる今日の困難をあきらかにし、それを打開する実践を交流し、教訓と課題をあきらかにする第二分科会、

(三) 生徒が「子どもの権利条約」を自らのものにしていくとりく

み、憲法・平和教育、学校教育における自主的・自治的活動のとりくみを交流し、その教訓をあきらかにする第三分科会が設けられています。

それぞれ、みのり多い分科会討論を期待して基調報告とします。



高校再編の本質・現状と めざすべき高校教育改革の方向

—「私たちの学校」の創造を

大東文化大学教授 太田政男

高校生の学力と学習の状況——偏差値学力をめぐる、
一元的能力主義の競争の中で

今日、特に高校教育においては教育政策が目まぐるしく矢継ぎ早に展開されていますし、状況はきわめて複雑であり、それへの対処ということについても非常に困難な問題があるかと思いますが、われわれはなによりも今日の高校教育と高校生の現状に立つてそれを変えるという立場で出発したいと思います。今日の教育のもつとも根本的な問題が偏差値学力という一つの物差しで競争が行われているということは、すでに先ほどのさまざまなおなご報告のなかでも指摘されているとおりです。高校教育について見ましても、この三〇年間、貫して競争と選抜というものが強化されてきたと思

います。三〇年間というのは、高校教育の、特にその前半は急激な大衆化の時期でしたし、また七五年以降の時期は大学入試が特に厳しく、競争も激しくなってきた時期でした。

特に臨教審が大変大きな役割を果していると思います。臨教審は具体的な政策においては初任者研修やその後の日の丸・君が代の強制に見られますように、いわば具体的な政策としては国家主義的な政策において成功したと考えられます。よく当時から言われたことですけれども、臨教審には二つの大きな流れがあつて、一方は財界を代表する新自由主義の人たち、自由化論者と言われる人たちであり、もう一方が文部省の元官僚などに代表される、もちろんおおもとは一緒でありますけれども、国家的な統制を強調する立場という二つの流れの論争があつたということはよく知られているとおりであります。



自由化論者は小・中・高、あらゆる段階における公立学校の学区を撤廃し、市場原理や自由競争を強めて教育における競争を強めようとした。しかし、それは、特に第三分科会と言われる文部省の人たちが集まつておりましたところなどとの綱引きによって、最終的にはその巻き返しが成功したかに見えて、初任者研修や教科書の新しい検定制度ということになつたわけです。そういうわけで、競争を強めたという点で、言い換えば能力主義を強めた点では、臨教審はさしたる具体的な政策を打ち出さなかつたかに見えるわけです。

高校教育について言えば、六年制中等学校とそして単位制高等学校という新しい制度を創設したに、ある意味では止まると言つてもいいかもしません。しかし、実際においては臨教審の討議それ自体が、国民の間に、というよりもさまざまな教育関係者の間に大きな影響を与え、教育における市場原理に立つ競争というものを非常に強めたということがあります。特に、臨教審は最初のころは一部の私学や塾や予備校を含めた教育文化産業に多大な期待をかけていたわけで、臨教審のころからそういう公私間の競争、あるいは塾や予備校などの台頭ということが起こってきたと思います。

一元的能力主義の競争が臨教審によつてさらに加速され、そしてある意味では集大成されたということであつたと思います。そうしたなかで、競争で高校生はシリを叩かれ、また自ら競争のなかに巻き込まれて激しい勉強をさせられることになつたわけで、世界一の勉強時間、世界一の学力ということになりました。勉強時間についてはそれぞれ教育の制度が違いますので単純な比較ができないとこ

ろがありますけれども、一日あたりの学校での勉強時間は長いほうでありますし、塾や家庭での学校外での勉強時間を合わせれば、ほぼ世界でトップであろうと思います。

一年という単位で見ましても通学日数は世界で最高に長いレベルに入っている。日本で言えば二三〇日、ヨーロッパの多くの国々は一八〇日から一九〇日ぐらいでありますから、二カ月ぐらいも多く勉強しているわけですし、一部の地域に行けばそれにさらに夏休みや冬休みの補習が入るのですから、一年あたりの勉強時間もまた長いということになります。さらに話を飛んで言つておきますと、在学期間というものが日本の生徒たちは長いわけでありますて、いま一六歳を超えて就学している割合でいいますとイギリスが六割くらいでしようか、フランス、スペインなどで七、八割くらい。アメリカと日本が九割を超して一〇〇%に近いわけでありますけれども、アメリカなどでは一六歳くらいからブロックアウトが始まりまして、一八歳まで就学するのは七割と言われておりますから、実際上、就学期間も長いと言つていいわけであります。

一日あたりの勉強時間がいちばん長いわけですが、最近のさまざまな調査を見ますと、この一〇年間にさらに伸びているということが言われております。NHKの調査の結果では、一九七〇年から九年までの二〇年間に、二〇分間学習時間が伸びています。そのぶん減っているのは睡眠時間で、たしか小学生で一六分減っているんじゃないなかつたかなと思います。ちょうど勉強時間に見合つて睡眠時間が減っているということで、日本の子どもたちは慢性的な睡眠不足状態にあるわけであります。

これは大人も同じでありますて、成人労働者の労働時間と子ども

の勉強時間というのは国によつてだいたい比例するのではないかと考えております。それだけ勉強するわけですから、日本の子どもたちの、カッコづきではありますけれども、学力というのは低いわけはないと思います。こう言いますと先生方のなかには、これは自分の高校生を相手にした実感と違うと言われる方が多いと思いますけれども、しかし少なくともテストではかられるというかぎりにおいて、そしでもう一つの条件をつければ、平均点で言えばというかぎりにおいては、日本の子どもたちは世界でトップクラスにあるわけです。

この間、さまざまな学力の国際比較調査が行わされました。有名な数学の調査や理科の調査などがありますが、だいたいいずれにおいても日本の子どもたちは学力がトップとなつていています。私はなぜそういうことを強調するかといいますと、これも率直に言つたほうがいいと思うんですが、高校で学力問題が起つたときに学力が低下していると言わされました。最初に言いだしたのは、たとえば長野県では県の経営者協会が言いだし、それを議会で保守党が問題にするということで学力低下が言われたわけであります。長野の場合でありますと、大学進学率が下がっている、あるいは有名大学の進学者数が下がっている、あるいは現役合格率が下がっているというしかたで言われたわけでありまして、こういった事情は多かれ少なかれ地方では同じ状況がありました。

これはいわば競争の結果だと私は思うんですね。たとえば、有名大学に占める私立高校からの合格者を見ますと、有名大学になればなるほど、私立大、特にある特定の私立高校からの入学者が増えている。あるいは國公立大学の付属ですね。超進学校と言わるとこ

ろの子どもたちがそういう席をだんだんと独占するようになつてきているという事実があります。したがつて、そういう学校を持つてゐる県の有名大学への進学が増えるということになるわけであります。地方の県は多かれ少なかれその点では減少するということになつています。

私も長野に帰りますと、「あなたのころに一つの高校から東京大学に行つたのよりも、いま長野県全部を合わせてもまだ少ない」という言われ方をするのですけれども。三、四年前でしょうか、たとえば東京大学で言いますと、私立高校と国立大付属の合格者が半数をわつてますます増えているという状況になつてているわけです。ぼくは昨年ゼミで学生と一年間かけて、代々木とかあちこちの予備校の学力テストの結果をいろいろと比較分析してみました。だいたいその間、いちばん上といちばん下とか変わらないわけですが、ますますある意味では学力格差が開いていると、予備校の調査のなかでも言えると思いました。そういう状況としてとらえませんと、つまりいまの競争の強化という社会的な文脈のなかでこの問題を位置づけませんと、学力は下がつたからというだけでただ子どものシリを叩く、あるいは大学進学率さえ上げていけばいいという対応になつてしまふと思つたからであります。

しかしそういったからといって、学力の問題について深刻な問題がないかといえばそうではございませんで、その影でより本当の意味で深刻な問題がすすんでいるということだと思うのです。一つは、あらゆるレベルにおける学力格差の拡大、学力の分極化ということではないだろうかと思います。それは個人の間においては、できる子、できない子という差が以前にもましてはなはだしくなつてきた。

一方では、大変難しい、量も多い大学の入試をかるがると解いて突破していく高校生がいる一方で、アルファベットや小学校段階での算数でもつまずきを持つているような子どもたちも大量に生み出されていることがあると思います。

しかも、個人の学力差の拡大というものは、最近の早教育、あるいは早期教育の流行のなかで、小さいときから格差がつけられて固定化していくような傾向にあると思います。また、学力の格差は個人の間のみならず、学校の間、先ほど言いましたように地域の間でも広がっておりますし、それは家庭の間の格差というものを反映するようにもなっているということだとと思うのです。

先日、埼玉のある私学の組合の方にお話を聞いたんですけども、その学校の偏差値というものと生徒を通わせている家庭の経済的な階層というものが、かなり比例しているのではないかという話をされていました。大学においてもそういうふうになつていて、昔は国立大学というのは貧しい子でも入れるというふうになつていたのが、いまは必ずしもそうではないことがあります。学力といふのはそうした家庭の持つている経済的な不平等や、最近では文化資本と呼ばれるようなさまざまな環境の所産として、子どもたちに刻印されるような性格をますます強めているのではないかと思います。東京大学でも、三年ほど前ではないでしょうか、平均年収が一千万円を超えたということが生協の学生調査などで報告されております。

深刻な問題の第二番めは、学習の歪みと学習意欲の衰退、そして学習観をめぐる問題ということではないかと思います。たとえば、先ほど長野のことを例に出して申し上げましたけれども、ぼくも長

野についてはさまざまなものを見ました。しかし、客観的に学力が下がっているというものはありませんでした。そして、学力低下といふにいちばん実感されておられる先生方の調査でも、第一位に問題とされておられるのは、学習意欲の欠落ということでございました。そして基礎学力の欠落というのがアンケートの二番めにありましたけれども、それも中身を見ますと、ノートをとれないとかそういう問題として出されていたわけです。そういう意味でも、私は学習意欲の問題というものが大変大きくなっているのではないかと思います。NHKの生活時間調査で見ましても、これは小・中・高校生ともにそうなんですが、学業の時間が全体としてこの二〇年間に伸びているなかで、しかし家庭での学習時間、一人で勉強する時間がどうのが大幅に減っているわけあります。特にそれは高校生においてその減少が著しいということが明らかであります。

学習意欲というものと、自宅学習時間というものがおそらくなんらかの意味で関係していることは事実であろうと思います。しかもその学習意欲についても二極化ということが進行しているわけでありまして、このNHKの調査では一九八〇年に、自宅学習時間ゼロという高校生が一四%いたのが、一九九〇年には二七%とほぼ倍増しているということになります。そういうことを見ても、学習意欲の衰退というものが考えられると思います。

それから、学習の歪み、学習観をめぐる問題というのもすでに先ほどの基調報告を含めて詳しく報告されております。私自身の大学生のことでもこの点では痛感することがございます。この数年間は大学入試が非常に厳しくなりまして、うちの大学も偏差値が、七、

八ぐらいの学科によつては上がりました。学生の、あるいは社会的な評価が本当に上がつたんであれば、もちろんそれはわれわれとしても大変嬉しいわけですが、どうもそうではないようで、受験競争の激化の結果にすぎないのかもしれません。受験者数は二倍以上に数年間で増えましたし、二万人ぐらいだったのがおととしくらいからは四万人を超しました。去年は四万五千人ぐらいいたと思います。

今年からまた少し減りはじめておりますけれども。そういうなかで先ほどのような偏差値の急上昇ということがありました。昔はうちはT D Kと呼ばれ、J A L II上智、青山、立教に対して、拓殖大と国士館、T D Kと呼ばれまして、男の多い入りやすい学校と言われたみたいなんですけど、いまはそうではありませんで、大東亜帝国と言われて、大東、亜細亜、帝京、国士館、右翼的なところは変わりませんが、これは急に入りにくくなつた大学ということらしいですね。

今年、二年生の講読というので教養課程のものをやつております。それは自主的にグループで課題を立てて研究をしていくというものなんですが、夏休み前にいきなりクラスのあるグループのなかで殴り合いが始まりました。三人のグループだつたんですけども、一人の学生は一年浪人して新聞配達をして入つてきたとても真面目な学生なんですね。ところがあとの二人は、そのときの気分もあつたのかもしれませんけれども、競馬や競輪の話を書いてて茶化すよな態度ばかりをとつていた。その面白目な学生がいきなり殴りかかつてしまつたわけですね。さつき高校生が幼いというのは言いましたが、まことに小学校のようで、幼いと言えば幼いようなことなのかもしれませんけれども、私はそれが起こつたときには、「あつ、

まあ良かつた」と思つたんですね。なかなかいまほつておきますと大学というのは大衆化状況ですから、本当に大衆的な文化に学生がずっと流されてしまう。特に自主的な研究なんかをするとそういうふうになつてくる場面が多いなかで、そうでない学生もいるんだ、ある意味では矛盾が起つたんだということで良かつたなと思ったのです。

いくつかグループがあつたんですが、夏休み後に今度は発表を始めたといったわけです。教師論のグループでした。私はいろんな本を紹介して、神田修さんとか、土屋基規さんの本なんか学生が持つていたものですから（そういう本を持っていれば安心というわけでもないんです）いま教師が持つている悩みとか、置かれている状況とか、採用養成制度の問題点ということについて報告してくれるかと思っていたんですが、あにはからんや、報告は「どうやつたら教師になれるか」という報告なんですね。実際に教育基本法の前文の穴埋め問題をつくつてきてまして、まだ彼らは教育基本法について勉強していないんではないかと思うんですけども、こういうのが出ますのでみなさんやってみてくださいというふうな演習的なことをやつしているわけですね。一次試験になると、県によつてはコネが必要があるいはお金が二〇〇万かかりますとかですね、そういう報告なわけです。

いま、受験競争をしてきた学生たちが、うちの学生なんかとてても全体としては素直なほうだと思うんですけども、そういうなかで学校の知とかそういうものについてなかなか信じないということがあるのでみなさんがやつてみてくださいというふうな演習的なことをやつしているわけですね。一次試験になると、県によつてはコネが必要があるいはお金が二〇〇万かかりますとかですね、そういう報告なわけです。

うことが非常に強くなっているのではないか。これは受験を中心とした知、受験知というふうに言つてよければそういうものに対する反発があつて、一方で非常に実用的な知というものに向かいます。

しかし受験知だけでは満足できないので、一方では自己啓発やさまざまな宗教的な活動に参加していく人生論的なグループもあるといふふうになつていくわけであります。学習に対する見方や知に対する見方というものが、そういうふうになつてしまつた。

先ほど基調報告で、人間の尊厳を自信や誇りとともに教えるという箇所がありました。人間の尊厳にはカッコがつけて書かれておりました。人間の尊厳というものを、「おまえはこれを知らなければダメなんだ。○はとれないんだ」というしかたで教えれば、それは人間の尊厳というものにはまったく関わりなく、むしろそれを奪うしかたで子どもたちは身につけるわけですね。人間の尊厳というものを教えるときには、やはり人類がそれを獲得してきた歴史というものを、精神やそういうものもわかるようなしかたで、そして、できれば自分自身の誇りや自信を育てることと一緒に、人間の尊厳というものが教えられなければならないと思うんですが、受験知といふなかではむしろそれは反対の方向を向く。人間の尊厳を壊すようなものとして人間の尊厳が教えられるというふうなことになりかねないわけであります。ぼくは学生のそのグループの研究を見ていて、「ああ、教育基本法様にもつたいない」と。教育基本法様というふうにあがめるのもまたいけないんですけども、そんな気持ちがいたしました。

能力主義の社会的土台と高校教育の現実

いまそういうなかで、子どもたちのある意味での学校からの脱出というのが始まつてゐる。これは実際的な意味では小・中学生の登校拒否がそうでありましょうし、高校からの中退もそうであります。精神的な脱出ということから言えば、かなり多くの子どもたちが、これもある意味では実際的にアルバイトやそういうところに逃げたり、少なくとも気持ちのうえで勉強が好きだとか、勉強したいというふうなこととなかなか学校が結びついていかないという深刻な問題があるように思います。

偏差値という一元的な能力主義というものが、このように支配的な原理になつてゐると思いますけれども、それは教育の世界がそうであるからというだけでなく、それなりの社会的な土台というものを持つてゐる。ある意味では社会的な合理性というものを、偏差値というものが持つてゐることがあるのではないだろうかと思います。それはよく言われていることですが、日本型企業社会化ということにあるように思います。日本型企業社会というのは、終身雇用と年功序列と企業別組合というのを二種の神器とすると言われておるわけであります。終身雇用、年功序列というかたちで企業は労働者の全生活、全生涯を抱えこむというか面倒を見る。たとえば福利厚生というしかたで本来社会的に整備されるべき社会福祉施設などを、企業で面倒を見る。あるいは、年金も定年退職したあとも企業の場合は国民年金なんかに比べれば非常にいいわけであります。そういうしかたで企業の傘のもとをはずれると非常に困難な

人生があるというふうに、いま日本の社会のなかではなつてゐるわけであります。

そのようにして、労働者の側から言いますと、自分の全生活を捧げ全生涯を捧げるということでありますけれども、それのもつとも顕著な問題は「配置転換」が可能な労働力として日本の労働力があるということだらうと思います。専門性とか職務、ヨーロッパのようにデマーテーションというふうなものがはつきりしない。いい意味でも悪い意味でも、いまここは悪い意味で言つているんですが、企業主義的な、企業の使いやすいという意味での「多能工」的な日本の雇用管理というものが、日本型企業社会というなかであるということだらうと思います。

これもさつき話が出ました、おととしの、これは日高教が主催し

てやつたわけですが、中等教育の国際シンポジウムのときにつランスの代表などに、「あなたの一週間の持ち時間は何時間ですか」と聞きますと、「二〇何時間」と答えられるわけです。「あなたの一週間の労働時間はそれではどうですか」と言うと、同じ時間が返ってくるわけです。われわれ日本の教職員はなかなかそのことが理解できなかつた。われわれが答えるときには「労働時間は四〇何時間ですか」というふうに言うわけですが、逆にヨーロッパの人たちにはそういうことが理解できないわけですね。ヨーロッパの場合の契約というのは週何時間教えるというのがそのまま労働時間になつてゐるということなんんですけど、日本の場合はそうではなくてそのほかのさまざまな生活指導や教育事務も含んで学校の教員の仕事というものがあるわけですね。そういうふうに契約の内容自

体が日本の教師の場合はより包括的なわけですが、しかしそれでもなお日本の教師というのは専門性という点ではかなり身分を確立された職業だと思います。

しかし、特に最近の企業では、その専門観の境目というんでどうか、そういうものがどんどんとなくなつてしまつてしまつて、教育学科からも最近は一般企業への就職が増えています。ある会社に就職しますと、たとえば半年間なりなんなりはみんなコンピューターの訓練ですね。それでも十分コンピューターの教育は間に合う。また半年間は全員が営業に出て、たとえば保険会社の場合だつたら保険を売つてあるいたりして、それからいろいろな職場に配置されローテーションをしていくことになります。

自治体労働者の場合を見てもそうでありますて、私は本来自治体労働者などは専門的な仕事が多いと思うんですけれども、一部の現業やなにかを除けば、これもだいたいはローテーションしていく職場であります。企業に就職する、あるいは雇用者のところに就職するわけであつて、自分の専門性や個性やなにかをもとにして契約をするという社会ではないわけであります。このどこでも「配置転換」が可能な労働力というのは、一般的な知的な能力というものを要求されるわけであります。これはジェネラルインテリジェンスというもので、よく言えば全面発達ということになるわけですが、しかし日本のものの中では、自分の個性や専門性や人間性を売り渡したうえで企業に使いやすい労働力ということとなつてくるのだと思ひます。

特に七五年以降、低成長に入つてからは、出向や「配置転換」というものが企業という枠を超えて、そして地域という枠を超えて、

出向というかたちで、あるいは単身赴任というかたちで、あるいは海外赴任というかたちで、どこへでも行かされる労働力というふうになります。こういうのは人間的な生活や家族と一緒に楽しく暮らす、そのため働くという原理とはまったく逆なことであります。しかし、働くために家族があるということになつていています。

つまり、偏差値というものがそういう労働力評価としてある種の妥当性を持つてきたのではないかと思います。たとえば、うちの大學生の就職状況を見ておりましてつくづくとそう思います。昨年夏の『週刊読売』に、大学別の就職先一覧というので出ていたんです。が、たとえば有名私学、慶應、早稲田というようなところのうちの大学では全然違うんですね。しかし、いま企業は特に指定校制度というものをおおっぴらにすべてがやっているわけではありません。しかし隠然はあるわけです。たとえば、リクルートブックというものはどこの大学へくるのも一緒だと思つております。四種類あるんだそうです。つまり、大学によって送るリクルートブックが違うんですね。もちろんこれは理科系とかそういう区別もあるのかかもしれないし、四年制と短大という区別もあるのかかもしれませんけれども、そういうのも含めて何種類かのリクルートブックがつくれれているということです。

またうちの大学の学生なんかが行きますと、特定の大学別に集められて、ある大学については学力試験免除というふうなことで屈辱的な思いをして帰つてくる学生もあります。そういうことを見ていましたと、私は企業というのは大学の教育そのものについて信頼しているのではないのかと思いますね。うちの大学の教育を信

頼しないからというのではなくて、あるいはほかの大学の教育を信頼するというのではなくて、やはりそこには偏差値という学生の持つている潜在的な労働力可能性としての能力を評価しているということがあるのではないかだろうか。そういう意味で偏差値というものが社会的な有用性というものを持ちえてきたのではないかとも思います。

そういう状況を教育の制度といつもはいつこうこの間強化してまいりまして、特に七〇年代後半以降は学区拡大、その他のしかたで教育における自由競争が強まり、選抜競争のシステムというものが教育制度的にも強化されてきたのだと思っております。そういうことの結果、高校間格差というものが今日ははだしくなり、高校制度が統一性を持っているということすらも危うい状況にいま立ちはだつてゐるのではないかと思います。

先ほど私学の例で予備校の単位を認定するというのがありました。が、そういうふうに高校制度というふうに考えられていたものと、それ以外のところとの境目というものが高校制度自体が多様に分断されるなかで、曖昧になつてきているということがあると思います。トップには全国区の超進学校が形成されている。そしていわゆるカッコつきの底辺のほうには単位制高校あるいは専修学校の高等課程というようなものが存在するような構造ができている。そのあいだに圧倒的な大多数の高校があるわけで、しかもその高校自体も大変大きな格差状況のなかにある。

ある先生は高校はそのなかでも高校生にとってみれば四つの高校があるのではないかと言つておりましたが、一つは「通過高校」というのだそうで、これは大学進学をその学校の目標とし、高校生も

またそうしている学校ということでありましょう。受験教育のものでは、高校は懐かしい母校というふうにはなり得ない單なる通過点にすぎないという意味での通過高校。そしてその下に、大学進学の圧力がそれほど強くない「広場の高校」があるんだというわけであります。楽しく学校生活を送るというので、その下に「福祉の学校」というか、ある意味では大変生活的なことも含めて子どもの面倒をかなり見てやらなければならない福祉と「管理の学校」というものがさらにある。いわゆる困難校では管理に教師が追われ、子どもたちもまたそのなかでそれに抵抗し、あるいはそれに適合しながら育つていくんだというわけであります。

われわれは学力でいつても、高校というものの持つている意味でいつても、先ほど基調報告のなかに統一的な高校像の破壊という教育政策のねらいが書かれておりましたけれども、ある意味ではもうすでにそうした現実はあると言うとまた論争になるかもしれませんけれども、それに近い状況があるということについて、われわれはこの現実認識をしっかりとしておく必要があるのでないでしようか。

高校政策の「修正」

こうしたなかで、いま高校政策の修正が行われたということでありましよう。特に第一四期中教審というものが持っていた意味は小さくないのではないかと思います。ぼくは単純な臨教審答申の発展とか継承というふうには考えませんで、一面でそれを引き継ぎつとも、しかし理念として臨教審までが持つていった一元的な能力主義

の志向というものを制限し修正しようとするところがあるのでないかと考えます。多元的な能力主義による横並びの競争へというのがその政策志向として、スローガン的に言えば、偏差値から個性へ、偏差値から人間性重視の教育への転換というふうに言うわけであります。

うことは、ここでも踏まえておかなくてはならないと思います。

もう一つは、企業社会の揺らぎと労働市場再編成の要請というものがあるんだということだと思います。終身雇用を軸として行なつてきた日本型企業社会が、いまのまでは維持ができないということで、ヨーロッパ型の労働力市場をめざすということがいま志向されているわけであります。ヨーロッパ型というふうに言つてもそれはかたちだけのことであつて、終身雇用でないというだけのことであります。いろんな研究の著作なんかも最近出でておりますが、これは大変わかりやすいので私は持つて歩いているんですけども、今年の八月の転職マガジン誌の一冊、「B-ing」です。この特集は「終身雇用幻想があなたをダメにする」と書かれています。そして具体的にはなにかというと、いままではゼネラリストを養成してきた。企業へ入れば「配置転換」が可能で、偏差値が役に立つようなのであつたけれども、これからは専門職制度でいくんだと。いままでは会社が人生のプランを決めていたんだけど、これからは自己申告と自己責任でやつていくんだというふうになつた。給料は年功序列であつたけども、これからは能力給、年俸制でいく。「丸抱えの福利厚生」はこれからは給料で支払います。新卒至上主義ではなくて中途採用、パート、契約社員、こういうものが主流になるでしょう。これは中教審や臨教審にも書いてあつたことです。契約社員やパート、アルバイト、そして派遣労働等でやつていくということであります。

外部労働市場、常勤の内部労働市場に対しても外部労働市場と言いますが、それを増やしていくのがいまの企業の戦略であります。これはむろん国際競争のなかで終身雇用制は維持できない。人

件費がかかりコストにはね返るので、いまどんどん日本も資本輸出をし海外に進出をしているわけですが、それと太刀打ちできないというので軽量化しよう、人件費を省力化していくというのがその一がそうした外部労働市場になるであろうと予測をしていましたが、当時八人に一人でした。いまは外部労働市場、パート、アルバイト、契約社員等はだいたい六人に一人というふうになつてきております。この間、いまの不況に入る前の好況のために人材不足があって、外部労働市場が企業の思うようには拡大しませんでしたけれども、しかしそれでもなお拡大していることは事実であります。情報産業、医療労働等々、それから流通の特に販売部門ですね、スーパー、コンビニエンスストアなどでは、そうした職種がいまや主流であります。

医療の現場でも、いまどんどんと派遣労働化しているんですね。たとえばX線技師なんかは人材不足ということもありますけれども、数人で組をつくつしていくつかの病院を回つてあるくというふうにだんだんとなつてきているわけですね。

もちろん、ヨーロッパ型の労働市場に移るということは、現在の状況のなかでは労働者にとつては丸裸で労働市場に投げ出されるわけでありまして、終身雇用以上に厳しい現実があるわけであります。これはつい先日の朝日新聞で、「ホワイトカラードコヘ行く」「去るは苦痛、残るもなんとか」というふうに書いてあります。いまの状況のなかでも大変だし、しかし尚向や若年定年制、最近は人生二回就職制度というふうなことも導入されたりしているわけですが、そういうふうになつても大変だしということでありましょ。能力

主義の波がひたひたしているということが書いてありますて、ある人は「終身雇用は建前はともかく実態面ではすでに崩れています」ではないか」というふうに書かれているわけです。

われわれはこうした社会的な制度、労働力政策や労働市場政策自体に対して、どういう態度をとるか。どういう対抗案を持つていくかということ自体が一つの問題でありますけれども、少なくとも事実としてはこういうのが広がっていくでありますから、そうした面での権利や生活を保障するというふうなこれから見通しといふものが非常に大事になつてくるであろうと思われます。

たとえばダンプの労働者でありますとか、職人さんの世界でありますとか、そういうところは高校を中退した子どもたちや、高校に進学できなかつた子どもたちがたくさん就職しています。しかしその土建のところに働いている若い人たちというのは、たしかにまだ高校時代の名残で黄色い髪の毛をしていたり、大変華やかな職人さんの恰好もするようになります。ほんとについ先日まで、学校の有名な荒れた生徒であつたのが、もう二〇歳くらいになつて、子どももいて、しかし結構頑張つているというふうなことを目にしたりもいたします。私たちは、そういう社会的な視野を含めて、彼らはどういう学習の機会を保障していくのかということをこれから考えていく必要があると思います。ともあれ政策の側はそうした意味での労働市場再編成の要求というのを出してきて、そうしたことが今日の高校政策のもとになつていています。

高校でいいますと、教育内容の面で、学校の制度の面で、そして高校と中学を結ぶ高校入試の面で、あらゆる面で新しい政策がいま展開されつつあると思います。教育内容の面では言うまでもなく、

新しい学習指導要領が来年から実施されようとしており、小・中ですでに問題になつております新学力観にもとづく評価も来年から始まるということになるわけです。また、高校入試改善についてもすでに触れられましたとおり、二月からではありますけれども、私の実感では特に夏以降、大変激しい動きが出てきています。地域の行政レベルでも具体化がされています。学校制度再編成では、特色ある高校づくりや総合学科の創設の構想が打ち出され、来年から総合学科についてはさつそく六県で創設されようとしている状況にあるわけです。

これらの政策の具体的な中身については、先ほど基調報告でもかなり詳しく触れられました。私はその点では繰り返すことはいたしません。しかし、実態として見ますと、最初に述べましたような一元的な能力主義という力は依然としてまだ強いということがある。それは社会的な土台を持っていますし、文部省がいくら業者テストがダメだと言つても、私は埼玉に住んでおり、うちの子どもはいま末っ子が中学三年生ですが、北辰テストという会場テストを受けています。そういう実態はまだある。上の子どもたちは今まで学校で受けていたんですが、今年からは休みの日に外へ行つて受けることになりました。偏差値は止めろというので新しい評価は五段階ですね。四のDとか、四のCとかいうふうに出てきます。

これどういうことかというと、まず一から五までの五段階に分かれ、さらにそれぞれがAからEまでに分かれる。五段階が五段階に分かれますから二五段階になるわけで、偏差値は五〇段階ですから、なんてことはない、偏差値の二点を一点にしただけのことなんですね。だから四のDとなれば、これは偏差値六〇か五九となりま

す。しかもちゃんとその北辰テストの結果返しのところには、参考偏差値というのがちゃんと丁寧についていて、五九・いくつと小数点以下までついているわけであります。まったく実態は変わっていないということがあるわけで、ぼくはやはり一元的な能力主義で学力を向上させるというふうな動きは依然として強いと思います。

そうしたものと、多元的な能力主義というか、個性にもとづく教育改革というふうなものを、いま上から文部省がかなり政策的に行おうとしていることがあると思うんですね。その二つがある意味では絡みあい、ある意味では補足しあい、ある意味では対立しあいながらいます。すんなりいうのが実際の地域の現場ではないんだどうかと思うんです。たとえば、学力の問題を見れば、一方では大学進学向上対策という一元的な能力主義的な政策が、これは相変わらずしかも行政の手によってすすめられているということがある。補習というような実態もなかなか変わらない。しかしその一方で、新学力観ということで、カッコづきの関心・意欲・態度が強調されて、そこでは知識や理解は軽視されるというふうなことが行われているわけで、まったく対立するものが同時的に進行しているというのが今日の状況であろう。そういう意味では補いあつてているわけですが。

新学習指導要領について言いますと、これ自体がぼくは妥協の産物だと思うんですね。新学力観につながるような自己教育力の強調とか、あるいは社会の変化に対応する能力ということは、これは教育課程審議会答申のところから書わっていたことです。そういう線に沿つて新しい学習指導要領を弾力化し、そしてある意味では量的にも減らしたいという趣向があつたと思います。しかし、新学習指導要領の最終版では、これはある意味では文部省の本意ではなかつたと思うんですが、さまざまな団体の圧力によって、必修や選択必修というものが予定以上に増えてしまつて、そういう意味では、一元的な能力主義の体制のもとでの詰め込みというのが、高校段階でもある。しかしその一方で、弾力化とか新学力観的な要素も学習指導要領の中にはあるというのが、新学習指導要領の事実ではないだろうかとぼくは思います。

高校入試改善もそうでありまして、一方では、学区の拡大とか、パーセント条項の拡大とかいうようなことがすすめられていますが、これはどちらかと言えば偏差値の競争を強めていく動きだろうと思ふんですね。高知の追手前高校の学区を全県一区にするというのも、そうした流れの動きです。だから高校入試をめぐっても、一元的な能力主義を相変わらず強めようという要求、地域的な要求と、それから多元的な個性にもとづく改革をすすめようとする上からの入試改革というものが進行しているんだと思います。調査書の改善等の入試改革、多元化、多様化、あるいは多段階選抜というのは、言うまでもなく多元的な能力主義に立とうとするものであります。この問題点についてもここでは触れません。

高校制度再編成についても、私はそういう要素というのがあると思います。たとえば、コース制というものをとつてみますと、これは名前のとおりに考えれば、文部省の言うような多元的な多様化ということになるわけです。たとえば理数系の子は理数科と、人文系の子は人文学とか芸術とか体育とか、そういうふうになります。しかし、そういうコース制化というのは、ある意味では一元的な能力主義にも乗れるわけで、一元的な能力主義の強化というものを隠蔽するというか、包み隠す役割もあるわけです。たとえ

ば、理数科というのは文字通りの理数科ではなくて、受験の進学コースだと。私学で言えば特進コースと同じような意味あいを持つているというところもあるわけですね。福島でしたでしようか、理数科人文コースというのがあるわけですけども、ああいうのは明らかにそういうものですね。言葉自身が矛盾しているんですが、しかし矛盾していくつけるを得ないというのは、そういうことではないだろうかと思います。

こういうさまざまな政策を見てきましてまとめますと、文部省がいまづくろうとしている新しい高校像というものが、その輪郭がしだいに見えてきたと思います。全体としては選抜競争というものを根本から否定するものではありませんし、実態としてはますます強まるわけですが、大衆的でそれぞれが特色ある学校ということに、縮めて言えばなるのかなと思うんですね。高校というものについての今までの考え方というものを、いつさい捨て去るということではないだろうかと思うんですね。

たとえば、最近の「内外教育」のなかに、先日開かれました普通科高校長協会の報告がされておりますけれども、もう高校はいままでとはまったく違うんだと。しかし、なかなかそれが現場までには伝わっていかないというような言い方で、文部省の人が報告していました。大衆的というのは文部省なりの大衆的という意味であります。たとえば、今までのイメージというのは一定のところまで子どもたちの学力を到達させる。課程主義、あるいは習得主義というようなものを放棄するということであるわけですが、そのためには地域によってはさまざまな逆転現象というものがいま起こっていると聞いています。

たとえば、二次募集というのをめぐって、校長の側があるいは教育委員会の側が二次募集をしたい。二次募集というのは、本来的に考えれば高校全入に近づくということですから、それ 자체は大変大事なことだと思うんですが、しかしそれに対して現場の先生方が反対をするという状況がある。あるいは履修習得をめぐって、中退者を校長のほうが一人も出さないというのに、現場のほうが逆に中退者を出してしまったような構図がつくられているんだと思います。そういう点でも、いまの状況は非常に複雑な状況になっていると思います。

「私たちの高校」を創造する

最後に、われわれはどういうことを実践的課題とするかということとであります。さまざまな政策に対して、もちろんわれわれはよく考えてその問題点を指摘し、批判し、くつがえしていかなくてはなりませんけれども、しかしわれわれがなによりも問題とするのは、いまの高校の現実を変え、高校生の現実を変えていくということだと思います。私なりにそれを表現すれば、「私たちの高校」を創造するという実践的な課題から出発するという以外にないであろう。そして、こうした学校をつくることと合わせて、こうした学校や実践をつくることから制度改革を展望していくことになるのではないかと思うのです。

「私たちの学校」と言うときに、さまざまな人にとっての私たちの学校というのはあり得るわけですが、まずなによりも高校生にとって私たちの学校でなければなりません。そのためには知と学び

の転換ともいべきことがいま求められているのではないだろうかと思います。その一つとして、われわれが今まで言つてきた国民的共通教養論というふうなものを検討し、再構築していくといふことが必要なのではないだろうか。こういうふうに言いますと、再構築というときにそれは国民的共通教養という言葉を使うのだろうかというふうに、つまりこういう言葉を使うこと自体が問題だと批判する人もあるようだ。大変難しい状況がいると思います。

私はそういうことで、ここ数日宮原誠一さんの文章を読み返してみておきました。宮原誠一さんは、戦後、高校教育の研究をいわば開拓的にすすめてこれらの方で、国民的共通教養ということについてもいち早く中心的に提唱された方であります。一九六六年の『青年期の教育』という岩波新書が一つの集成成といふか、まとまつたコンパクトなものであります。ちょっとあまりに歴史的で理論的なことに立ち入りすぎるかもしれませんけれども、シンボジウムでもありますのでちょっとお許しいただいたいと思うんですが、宮原さんはこのなかで、一九六六年の時点ですけども、これから日本国民としてすべての青年が身につけるべき教養の最少必要な基準をどこに置くべきだろうかといふように問題を立てて、青年の精神と肉体の両面にわたる多面的な能力の調和的な発達ということを考えると、最少必要基準、ミニマムエッセンシャルズは、ひとまず現在の高校程度ということになると言つておられます。

宮原さんはこのことを共通課程の思想と言つておられるわけです。これは戦前、教育科学研究会というのがあつたんですけど、そこであつた国民的教養論ある意味で連続するものであり、そういう意味では生産力理論的な基礎を持つておるんだと思います。宮原さんは三

つのことと言つておられると思うんですが、もう一つは、しかしそうであつても、子どもの教育の内容と方法が根本から再検討されつくり直されなければならないということを言つておられます。現在の高校程度ではあるけれども、いまの中身ではない。生産的労働と教育を結合させ、平和と独立の視点に立った教育内容をつくりだすことであると言つて、ここでは地域ととりくむ高校生として、千葉と長野と静岡の三島・沼津のコンビナート問題に立ち上がりた高校生の例を引いておられます。地域ととりくむ高校生ということでは、このあとに報告いたします高知の幡多高校生の運動などはまさにそれを引き継ぐものだというふうに思います。

第三に宮原さんは、これは非常にラジカルなんですが、学校そのものに対する根本的な懷疑というものを最後に述べているんですね。中卒青年の良さということで言つておられるんですが、どういう良さがあるかといえば、それは一言で言つて青年らしさということになります。物事を素直に生真面目に原則的に考える。自分の周囲に対し馴れあい的な態度をとらない。つまり、高校を卒業すると馴れあい的な態度をとるという意味ですね。特にそういう面での青年らしさである。大人たちにとって当たり前のことに對しても新鮮な疑いと批判の目を注いでいる。それに対して自分はどうしたらよいのかという柔らかな不安と悩みを持つておられる。そういうふうだから発言の姿勢が本気であつて、借り物や見てくれではない。そういう中卒青年の姿に私はしばしば出会つておる。こういうふうに書かれていいわけです。

しかし、宮原さんは言うまでもなくこのあとで高校全入ということを言つておられるわけで、高校が行く価値のあるものにつくり変えられ

れる」とによつて全入をすすめなければならないと言つてゐるわけです。」「ういう学校に対する根本的な批判というものを含んだ主張というのは、ある意味では宮原さん自身がマルクスから学び、デュウイから学び、そしてクロボトキンから学び、学校死滅論に非常にひかれながら、学校死滅論を批判するという当時のソビエト教育学の研究をしてきた。そういうことから、ある意味での矛盾を含むようみえるのだと思ひます。

したがつて、われわれはその国民的な共通教養論というものを單に量的な問題としてとらえてはならないし、そしてある意味ではすでにあるものとしてとらえることもないと。われわれは国民的共通教養を守ろうというときに、ややもすれば学習指導要領の必修科目というふうなことをイメージしたり、受験に必要な学力というふうなことをイメージしてしまうこととはなかつたかということについてもやや反省される気がするのであります。

それから普通とか共通といふことについて考えますと、歴史的に_{は general や common という意味と、academic という意味と二つ}の意味あいで「普通」という意味が使われてきたと思うんですね。

academic で座学中心で、わざと言えば進学教育というのが一つの顔であり、すべての子ども・青年・國民に共通なという意味での general と common ということがあつた。戦前、旧制の中学校について使われたときには、やはり academic という意味があつたんだと思ひますし、もともと中等教育というのはどこの国でも academic というものをもつて中等教育としてきましたわけです。

だから、非常に乱暴な言い方をすれば、國民教育ということと中等教育という概念はある意味ではもともと対立するものであつたと

言えるわけですが、そのことが普通教育の持つてゐる二つの意味としてもあるわけだらうと思います。そして今日競争の受験教育のかでは、本当の意味での academic にすらならないということがあるように思ひます。東大の吉川総長がこのあいだの普通科高校長協会で講演をされて、大学生の学力ということについて大変深刻な状況にあるということを報告しておられます。「高校の広場」の九号に、浦野先生が大学入試制度改革に関連して同じようなことを書かれております。

最近、「図書」という小さな雑誌でいちばん最初の見開きのところに扉の言葉がありますが、網野善彦さんという歴史学者（中世史の新しい方法でいま歴史学で活躍されている方）が学生を相手にしていてほんとに文化的な断絶ではないかとショックを受けることがあると書いていらつしやいました。たとえば石とか、一石、二石ですね。何斗というものがわからない。しかし私が網野さんはすごいと思うのは、われわれはこういう学生たちにわかるような歴史学を改めてつくつていかなくてはならないのだとそこで書いておられます。もちろん、学生自身もさまざまな歪み（われわれから見れば歪みと言われるもの）を持っているわけですが、われわれの側が、高校や大学が変わつて新しい学問や文化をつくりだしていくという必要があるんだということを網野さんは言つてゐるんだと思うんですね。

浦野先生の論文のなかに、東大の教養学部の再編成のことが書かれております。いま大学改革がどんどんとすすめられて、教養課程が廃止される。神戸大学をはじめとしてそれは大変な文部省の圧力のもとで行なわれていますし、そして私も私学ですがいま遅ればせ

ながら一生懸命やつてゐるところなんですが、そういう意味で言え
ば、新しい教育政策、新学力観的な政策がいまいちばん貫徹してい
るのはある意味では大学だと思います。そういう意味では、さつき
岡山高教組の内田先生が岡山大学の例としておつしやつたような評
価もある意味では可能なわけですが、ぼくはしかしそれだけではな
くて、文部省はたしかに変えようとしているなんだけども、それ
に対してもわれわれがどう見えるかということが、さらに問われてい
るんだと思うんですね。

大学人は大学人として必要だと思って必死な努力をしているとい
うことなんですね。東大の教養学部では、教養科目と総合科目と主題
科目というふうに分けて、従来の学問分野というものをまったく変
えてしまつて、従来の学問名を使つていらないんですね。高校で言え
ば従来の教科名をまったく使つておらないわけであります。この論
文で英語教育の改革の例も紹介してありますけれども、私たちから
見れば魅力的な面もあるのです。

私はやはりいまの大学の教育は改革されなければいけないと思
います。本当に経済学部の学生や法学部の学生にも、文学教育の水を
薄めたような英語教育でいいのかとか、体育というのはいったいな
んのために大学で必修なのかということについて真剣に考えていか
なければならないと思つております。

われわれはいま、高校生に学習指導要領にもとらわれず、なにを
こそ伝えなければならないのか、高校生になにをこそ学んでもらわ
なければならないのかということをはつきりさせていく必要がある
と思うんです。そのために、国民的共通教養ということから考
ますと、まず学ぶ対象の拡大ということが必要なのではないだろう

か。たとえば、労働や職業の教育はどうなのか。「高校のひろば」
九号では、茨城の黒沢先生が家庭科の住居学習のことを報告されて
いますけれども、さまざま�新しい領域や対象、課題というものが
あるのではないかと私は思います。

この間、そういうこともあって夏休みも私はいくつかの私学をお
訪ねしました。その一つとして、東京の和光高校の教研にまいりました。
和光はもともと選択教科とか総合学習でとてもいい実践をし
てきたんですけども、今年知りましたのは、三年生で必修単位を
うんと縮めたんですね。そのことの評価はいろいろあるかもしれません。
たとえば英語は必修じゃないわけですね、選択ではとれます
けど。選択単位は三年生で一五単位かな。非常に面白いと思ったのは、
そのなかで専門科目を入れて、そして専門科目部分というのを
これからどんどん増やしていくこうと、つまり労働や職業の教育をそ
のなかでやつていこうという改革をしようとしていることであつ
た。私学だからできるんだということを書うことはできますけれ
ども、全体として対象を拡大することで、academicなだけの教育
でない、教養主義や文化主義でない、生活に根ざし、実学に根ざし
たものにほんとうの意味で国民として、働く人として必要な教育内
容にしていく必要があるのではないかと思うのです。

それから、学ぶ方法の検討、あるいは授業をつくる課題というこ
とであります。たとえば、「国語にしてもそうですが、私は「スリ
R Sは基礎学力か」という文章をある小さい雑誌で書いたことがあります。
ヨーロッパでもスリーアールズがベーシックスと言われま
す。日本でも読み書き算が基礎学力だというふうに言われるんです
が、果してどうかということですね。これは現代コンピューターリ

ティラシィーとか言われるような急激な技術や文化の変化があるということを一方で頭に置いているんですが、もう一方で、われわれが基礎学力といつてむしろ落としてきたものはありはしないだろうか。

たとえば、読み書きというのが基礎学力と言われていますが、話す、聞くというのはどうなのであるうか。もともと書く文化、リティラシィーとそれから話す文化、オラトリイーというものがある。言語ということから言えばオラトリイーというのが基本なわけですね。世界で何千という言語があるわけですが、文字を持つているのは七五にすぎません。音声が先にあって文字が意味を持つということがあるわけですから、リティラシィーが学校の文化であり、リティラシィーが高級であるということによつて、オラトリイー、声の文化から切り離されてしまつたということがあるのでないだらうかと思うんですね。

私がその点で山本安英さんのものを読んでいまして、さまざまに大変勉強になりました。山本安英さんは木下順二さんと共にじごとをされてきました。木下さんは戯曲を書き、木下さんは山本さんが存在することに促されて書いた戯曲もいくつかあるわけですけれども、山本さんは役者として声を出す。その声を出すということにただ意味を伝えればいいというのではない、その言葉を一つ言うことで相手の心に自分の持つている感情を伝える、その心、情に響かせなければならないということで、さまざまな話す言葉の工夫をするわけです。山本さんと木下さんはそんなことから平家物語の群説を試みたり、そして最後は「子午線の祭り」（山本さんの最後の芝居ですけれども）であのよき工夫をしていったわけ

であります。国語の教科のなかで一時平家物語の群説が行わられましたけれども、それはやはり肉体としての国語、音声としての言語を取り戻すという試みなのだと思います。

僕万智さんもそういうことを書いておられまして、僕万智さんはリズムに首つたけだというんですね。今度岩波新書で『短歌を読む』というのを出されました。いちばん有名な「この味がいいね」と君が言つたから七月六日はサラダ記念日』という、本の題にもなつてゐる短歌ですけども、僕万智さんは自由詩をとらないで定形のもつとも厳しい短歌を選んだわけですね。これはリズムや音の世界に自分の憧れ、可能性をそこに見いだそうとした。たとえばこの七月六日というのは事実としてもなかつたし、素材はサラダでもなかつた。しかしながらなぜしたかというと、七月の七というのとサラダのサというサ行を集めたかったんだ言つてゐるわけですね。そういう音の文化というものが短歌というものにある。

私はそういうものに訴えることで、本当の学力を回復していくということもあるのではないか。たとえば、映画『学校』のなかで、山田洋次さんが岩波から出した本の中で、兵庫の定時制の高校の先生の実践に触れてこんなふうに言つています。「そのなかでこんなエピソードを先生が書いていました。穢黙症というんですか、ほとんどものを言わない生徒がいる。それでも定時制高校ではそのまま授業を受けられる。短歌の授業をしているときに、生徒が先生にこつそり教えてくれたんです。（○君を見てごらん（穢黙症の子ですね）指を折つていてるよ。机の下で指を折つて五七五の勘定をしているわけですね。そのときに先生はもしかして短歌つくつてあるんじゃないかなと思つたら、その次の時間に彼はちゃんと短歌を書いた。

それが悲しい失恋の歌なんです。どうしてこういうことができるんだろうか。やっぱりリズムだ。和歌とか俳句というのはそういう力を持つてあるんですね」となっているわけです。

僕さんもここでも書いていますが、万葉集というものはもともと文字を持たなかつたんですね。人から人に語り伝えられて、音で歌われていたのが文字にうつされたわけで、やはりそういう点でわれわれ音の文化とか生活というものにより近づいた教育内容をつくつていかなくてはならない。普通教科といわれるなかで、本当に普通ということの意味はなにかというふうに考える。別の実践で言えば、兵庫の藤本英二先生は国語表現という科目を実技だと言っていますね。実技としての国語、そういう試みというのはぼくは非常に面白いんじゃないだろうかと思つたりもいたします。

「どんな学校生活」ということでも同じであります。私たちが今まで学校の前提としていたものについても、たとえば規則とか校則とか、そういうことについてもある意味で根本から疑つてみると、いうふうなことも考えていかなくてはならないのではないか。そういうときに、たとえば定時制やさまざまな私学などで行われているような試みなども参考になるのではないか。映画『学校』はやはり学校生活、教師と生徒が管理や評価の対象として向かい合うのではなく学校のあり方というのを示していると思います。そういう緊張と対立のなかでの教師と生徒の関係のなかでは、生身の人間は出でこないのではないかとすら思います。

二番めは、父母にとっての「私たちの学校」ということについても若干触れさせていただきたいと思います。高校入試の問題では、私も今年あちこち歩かせていただきました。兵庫・尼崎、長野、そ

して岡山。いざれも学区を拡大したり、隣接学区へのパーセント条項を拡大しようとしたり、あるいは総合選抜を崩そうとしている地域がありました。それらのいずれの地域でも、父母のエネルギーというものが非常に強いという実感をして帰ってまいりました。もちろん、先生方の真剣なとりくみもその基礎にあるわけでありますけれども、そのなかで私が同時に考えたのは、政策がそのように勝手なことをすることに対する怒りと同時に、現実の学校への強い批判というものがそのなかから出されているということがありました。

いざれも通学区ということで問われているわけですが、通学区のことをわれわれは学区といふうに呼びならわしているわけですけども、通学区というのはスクールキャッチメントエリアとかいうことで、それは進学調整のいわば制度であります。しかし、本当の学区という意味はスクールディストリクトとか、これはアメリカの概念ですけども、広く言えばスクールガバナー（学校理事会）とか評議会制度なんかも含めてある意味で権力概念でもあるわけです。つまり、だれが地域の教育と地域の学校の主人公であるのかというのが学区という概念だと思うんですね。住民が教育に学校に発言できるかどうか。それに参加できるかどうかということでありまして、その筋道が住民にとって実感できて、そして住民の安心や信頼というものが学校に対してあつたときに、自分の子どもを学校に通わせようということになるんだと思うんですね。

これは国民の教育権ということの具体的な姿であると思います。しかし、そのことに失敗しましたら、そしていまなかなかわれわれは父母の参加とかそういうことについて成功しないわけでありますけれども、父母は学校の選択の自由行使せざるを得ないというこ

とになつてくるわけであります。われわれは父母が学校に参加していく筋道をどうつけるかということをいま真剣に考えなければなりませんし、この間の教育運動を見ていればすでにいくつかの参加の筋道ができてきているのではないかと思います。

一つは長野、兵庫、岡山などの入試の改善に反対する動きのなかであります。特に兵庫の稻園高校の父母は、自分たちがつくった学校であるのに、学校の中身がなかなか自分たちの要求に沿わない。一言で言えば冷たい学校だというのでいまいろんな要求を出し始めているということでした。一万数千所帯のなかで七割とか八割とかいう署名を集めきるというようなこともありました。

第二番めには、愛知の私教連や、地域を本来持たない私学が父母懇談会などの運動で父母を組織し（組織という言い方自体が本当は適切かどうかわかりませんけれども）父母とともに運動をすすめいるということがあります。そして、この父母は学校に対してもさまざまな要求を出し、学校改革へと少しずつすんでいると思いまし

た。

また、公立では大阪の三五人学級の運動に私は大変大きな感銘を受けました。もともと「私たちの学校」と私が言つておりますのは、この大阪の三五人学級の人たちがそういう言葉を使つたからなんですね。あのいきいきとしたお父さんやお母さんたちの動きがなぜ出てきたかということをわれわれはいま分析し、教訓化していく必要があるのではないか。そしてそれが学校への要求として出てくるときには、父母の要求自体がいま多様だということがあります。父母自体が多面的な要求、場合によつては対立する要求を持つてゐるわけですけれども、しかしどりあえずはぼくはなんでもとにかく学校

に対して出してもらうことが大事なのではないかと思います。

第三番めは、学校を知つてもらうというさまざまな努力もすすんできたと思います。東京の都高連の人たちの高校調べということもありますし、逆に高校の側から一日入学とかいろんなしかたで高校生や父母に聞いていくことが行われておりました。私の住んでおります埼玉の高校でも、一日入学というので近所の中学生たちが参加して自分で確信を持つて高校に行けるというふうになつています。

第四番めに、地域の連携が、いま求められていると思います。中学と高校の連携では和歌山や兵庫等の例がありますし、高校同士が連携をしていくこと、特に私学と公立が一緒になって運動をすすめていくことがいま非常に大事になつてゐるのではないかと思われます。先日私学の獨協埼玉に行きました。父母と先生との懇談にも参加させていただきました。じつはきょうきていらつしやる木内先生なんですが、ちょっと怖いような几帳面な感じの先生なんですが、ところが父母の前へ行つたらぜんぜん違うんで驚きました。高校生にああいう顔して大丈夫なのかなと正直思つたんですが、ところが父母が「みんな木内先生が大好きなんです」と言つてゐるんですね。なんで好きになつたかというと、玄関でのつかいガラスを壊しちやつたんですつて。そしたらそこへ先生が飛んできて、怒られるかと思つら、「あー、派手にやりましたなー」というふうにして一緒に感心してくれたというんで、子どもたちがすっかり先生が好きになつたというんです。父母とのお話し合いを見ていても「あー、すごいな」と思いました。ほんとに柔らかで、そして父母がいろいろ質問しても自分が答えないんですね。「いやー、わかりませんな」

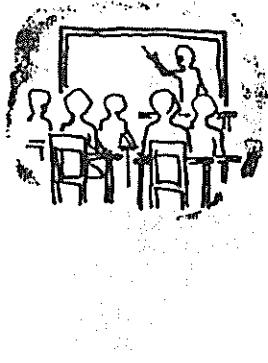
とか、こういうふうにやつてゐるわけで。なかなかいいなと思ひました。

教職員にとつての学校についてはお互に考えたいと思ひますが、一つだけ私がお願ひしたいのは、学ぶ喜び、生きる希望というものを生徒に伝えたいわけありますから、われわれ教師自身がほんとに学問研究、そして文化創造の主体になつていくことだらうと思うんですね。それはさまざまな市民運動や社会運動に参加しながら学ぶこともありますし、文化運動に参加することも大事であります。しかしあれわれ教師はなんといつても生徒とともに学ぶというか、さつき網野さんが言われたように、生徒の困難な現実のなかで学校を鍛え直すと言つておられたそのことが大変大事なのではないかと思います。

最後に、木下順一さんの昔書かれたもののなかでこういう文章がありました。「自分は創造の主体になるということは、どういう意味かで自分が現状肯定になつていくことと対立する。同じようなことだが守勢という姿勢もある意味で対立する。守るという言葉が流行つている。民主主義を守る、表現の自由を守る、あるいは子どもを守る会、たしかに守ることは必要なのだ。だがたとえば表現の自由を守るという言い方は、言い方としては威勢がいいけれども、つまり戦つてゐるということになるのだけれども、創造の主体としての自己認識がそこに入つてこないかぎり、それは文字どおりただ守勢というだけのことになつてしまふだろう。敵の圧力からただこちらを守るのみでなく、逆にこちらがつくりだしていくこと、そのことが運動体のなかの一人ひとりに意識され、自覚され、認識しあわされるというかたちで運動が展開されることによつて、守勢

は初めて攻勢に変わる。そして攻勢であるということはまた現状肯定でないということを意味する」というふうに書いてあります。

ぜひお互に頑張りたいと思います。



三大根拠地と結びついた 学校改革にのりだす生徒たち

愛知私教連 伊藤秀雄



いわゆる三大根拠地の基本となるべきものが、

企画を組んで文化運動をすすめています。

父母との提携です。愛知父母懇談会です。その父母の力をかりて、地域から、父母の要求からさまざまに学校の内実を変えていくという運動を愛知で行っているわけです。特に助成金増額に向けての運動です。

もう一つが、これも始まつてからかなりの年数がたちましたが、高校生フェスティバル実行委員会、つまり大きくいえば高校生の自主的な文化運動です。私学が中心で、学校の枠を超えて、三〇校、四〇校の生徒が学校の外で実行委員会をつくり、毎年春と秋にさまざまな活動をやっています。春は新入生歓迎フェスティバルで

の学校やさらには父母懇もからんで毎年一回、大学を会場にかり、夏休み中に四日間ぐらいの日程でさまざまな講座をやる一大授業づくりイベントという運動が発展してきています。

一校のなかでは校則やさまざまな決まりのなかで生徒も教師も父母も、「しかたないか、しょせん学校つてこんなもんだ」ということで元気をなくしているのが現状です。生徒も我々も、そして父母も一步学校の外へ出ると結構元気にやりたいことをやっちゃうパワーがあります。

それこそ「それがはたして授業か」、「それがはたして自主活動といえるのか」とか、いろんな合唱とか生徒自身の発案にもとづくいろんな主にミュージカルを、秋は一万人の規模で、大

聖靈高校の現状

私たちの学校は、聖靈という名前が示すとおりカトリック修道女会を母体とする学校で、中

学・高校・短大があります。一〇数年前の民主化闘争で一定の民主化を勝ちとつたのですが、単独ではなかなか学校改革というような根本的な問題は解決できないでいます。そこを、三大根拠地と結びついて、変革していくとしているのです。

聖靈高校の現状

私たちの学校は、聖靈という名前が示すとおりカトリック修道女会を母体とする学校で、中

ものの質とか、細々したことにはこだわらずに、「まあいいじゃないか」ということでやつています。でもほんとにやりたいものがあつてそこに生徒や教師が集つてつくりだすと、夢をとしたパワーが出てくるわけです。やっぱり一人と万人とか二万人とか結集すれば大きな力になるわけです。

そこに生徒も、教師も出ていく。聖靈という一つの学校のなかでの父母の役割はどうだとうことではなくて、愛知県全体の助成金運動のような大きな手応えのある運動のなかで、解放された父母の元気さというものが生まれてくるのです。だから、そこでつくりだされたものをどんどん学校に還流していくなかで、聖靈という学校がここ数年いろんなところで注目を浴びるような、さまざまな教育づくり実践をつくりだしてきました。

去年、生徒会やフェスティバルに参加していいた実行委員たち、あるいはフェスティバルやスマセミナーに参加した一般生徒たちが、要求を言葉にしてそれを束ねていけば学校というのは確実に変わっていくんだという実体験を積んできました。

去年一年間、校則改善にとりくみましたが、

すべてを変えたわけではありません。生徒自身の手でシンポジウムを二度、三度と繰り返し、生徒総会も動かして、要求項目を絞つていきました。要求としては「補助バックの自由化」ということになり、「なんだ、それだけか」みたいな感じもしますが、生徒にとつては大きな出来事なんです。つまり、自分たちの声が学校を動かすんだという実感がもてたということです。これは要求が大きかろうが小さかろうが、根本的なものであらうが枝葉末節なものであらうが、

生徒にとつては変わらないんです。その運動を通して、学校というのは自分たちが主人公であつていいんだという意識をかなりの生徒がもつことができたことです。

そういう校則改善運動や、あるいは生徒が実際に自らの要求で授業をつくりだし、そこに先生も乗つてくるという体験をへるなかで、では、今年は行事を変えてみようということで文化祭改革に乗り出しました。

私たちの学校はそれまで一定のレベルを持つた文化祭をやつてきたわけですが、生徒のなかに潜在的にいろんな不満があつたんです。たとえば、「お化け屋敷はいかん」というと「なんいかんのだ。ほんとにやりたいことがあつた

だしあげてきました。生徒は去年の経験から、シンポジウムやろうということで「文化祭改革シンポジウム」を二回、それぞれ二〇〇名ぐらゐの規模で開きました。そのなかで今年の文化祭は生徒が主人公になれる文化祭、生徒がほんとに楽しめる文化祭など、五つの精神というのを生徒の言葉で決めました。それを学校のなかの文化祭実行委員会が引き取り、委員会が主体となつて文化祭改革にとりくむことをはじめたのです。

去年は生徒会の執行部たちが中心となつて生徒議会を活性化させていきました。その結果、生徒会、生徒議会は元気になつたが、学校にある他の委員会はどうか。結局は先生の出先機関として先生に言われたことをやつていくだけの委員で、本当にその子は委員としての誇りをもつてゐるのだろうか。委員の役割を自覚して動いているんだろうか。いい意味での組織者、代表者の意識をもつてゐるんだろうか。こんな思いを教員たちは問題意識としてもちはじめました。

そこで今年は委員会を変えようということになりましたが、そこで元気になつた生徒会の執行部の生徒を使えば簡単なんですが、それはやめました。失敗してもいい、ちょこちょことやつ

て、あとを教師がシリ拭いすれば形はできあがる。でも、そんなことやつても現状は何も変わらないということで、委員会にやらせようということになりました。文化祭実行委員会が主体となつて、私たちの学校としてはかなり大胆な文化祭改革にとりくみなました。

生徒が授業改革にとりくむ

きょうはそこをあまりお話しするのではなく、校則を変えたり、行事を変えたりしてきた生徒たちが、いよいよ授業という領域に入りこんできたというところを中心に報告をさせていただきます。

改革された文化祭のなかで、クラスの模擬店、演劇、展示など従来のこの学校にでもあるような文化祭企画と並んで、授業が行われました。これも全部生徒がこういう授業をやりたい。こういう授業だったらあの先生にやってほしいと、生徒のほうで希望をだして、四つの講座が開かれました。

一つが理科。女子はあまり理科が好きではなく物理・化学といわれると拒絶反応を起こすべし不満が強かつたのですが、一方で「物理というのは本来面白い科目なんだよ」という生徒

も少しはいるわけです。そこで、ロケット飛ばしが面白いということで、水圧を使ったペットボトルのロケットを飛ばす実験をすることになりました。生徒が理科の若い先生にお願いして、水力ロケットの実験授業をグランドでやりました。

一つは、女子のファッションに対する興味関心は高く、ファッションに関する授業をやりた

いということになりました。ファッションの変遷を歴史的に追う、あるいはファッションの地域性について考えてみると、生徒が自分たちでレジメもつくつて授業をつくりあげたという講座が生まれました。

またこれも理科なんですが、本格的な爆発実験をやるという講座もやりました。

もう一つは、校則改正運動を中心に行なってきました。

た生徒たちが、「子どもの権利条約」で授業をやりたい。これも教室でやるんではなくて、外で開放的に、いっぱいお客様を集めてやりたい。みんなが参加てきて、楽しくて、気がついたら「子どもの権利条約」というのがわかつちゃう、そんな講座をやってほしいということで、私のところにきたんです。

名古屋に「天才クイズ」というテレビのロー カル番組があるんです。小学生を集めての公開

番組で、天才博士というぬいぐるみの博士が出てきて、問題に対して○×で答えるというクイズ番組です。あれでやろうと生徒が発案してきました。○×の画面カードをつくり、私は角帽をかぶり白衣も着て、「みんなおいで。『子ども権利条約』天才クイズがはじまるよ」とよびかけて、「子どもの権利条約」についてのクイズ形式の授業をやりました。

文化祭中にもかかわらず生徒の要求で自由な授業をやろうと言い出したこと、そして実際にやつてしまつたというのは画期的だったと思うのです。

さらに、文化祭の二日目に「授業改革シンポジウム」をやりました。これもパネルディスカッションで、パネリストは全部生徒が選定をしてきました。

今年公立を退職されてうちの校長になつた、かなり管理的な色合いの強い先生がいます。生徒のなかで「あの先生を呼ぼう」と言い始めました。つまり、パネルディスカッションというと同じ毛色の先生とか生徒が集まつて、仲間うちで話し合つて「よかつたね」というのでは面白くないというんです。片方に「管理主義でなにが悪い」という意見があつて、それに自称民主派とかいうのが絡まつて論議が高まつていく

のが面白いというのです。

校長は生徒の登校風景を見たいといって、朝、早く出かけていき、「おはようございます。パネルディスカッションに出てください」と何回か「攻撃」をかけるわけです。そのたびに逃げていた校長が、結局は生徒の情熱にほだされて渋々パネルディスカッションに出てくることになった。

親も「あのお父さんは面白いから呼ぼう」と生徒の情報網でパネリストの親を選び、来てもらいました。「中学からうちの娘をやっているけれども、聖靈へ来たのはきょうで二回めです」というお父さんでした。

これも庄巻だったんですが、聖靈を中退し、その後いつたん社会へ出て、それから自分で勉強をして大検を取得し、愛知県にある私立大学に自己推薦で入った生徒をパネラーで呼んだんです。これに校長は怒りましたが、結局は生徒が動いてしまっているということで認めたわけです。その子が、さらに自己推薦の仲間の大学生も呼んできました。他校の先生も呼びたいとです。怖いもの知らずというか、でもやつてしまふとこれが抜群に面白い討論会になつたんで

す。

一五〇名ぐらいの生徒や父母や先生たちが参加して結構盛り上がつたんですが、生徒というものは貪欲なんです。パネリストの話は面白かったけど、あまりにも話の内容が堅すぎて、生徒がなかなか意見を言えなかつた。もつと日頃自分が受けている授業の不満とか、もう固有名詞を出して、先生の授業は面白い、あの先生はおもしろくないとか、あの先生にはなにか言つたら殴られたとか、そういうのを含めて全部出したいということで、第二回シンポジウムをやろうということで、きのうやりました。

そういう動きと連動させながら、学園フィールドセミナーの二年めのとりくみを、きのうからスタートさせています。今年は学園セミナーという名前にして、そこの一つの企画に位置づけて、授業シンポジウム第二弾をやつたわけです。八〇名ぐらいの生徒が集まつて、二時間、全体で四五本の発言がとぎれなくつづきました。生徒の授業に対する考え方というのは我々教員が語ることとそう変わらないんですね。

たとえば、ある生徒が「受け身の授業は嫌だ、黒板を背に先生が一方的に話して、ただノートをとつて、どれだけ暗記したかを定期試験ではかられる。こんなもん知識の量をはかるだけ

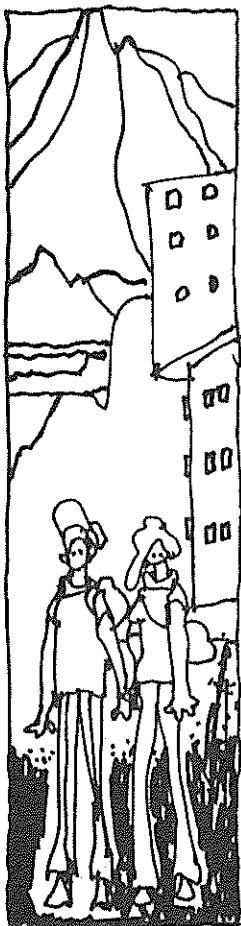
じゃん。そんなもの私たち求めてないんだよ。

やつぱり自分たちで考える、そして考えることを通して自分たちの力が発見できる。こんな授業がいいね」というような発言が次々と出てきました。すると、そこに参加している教員や父母も生徒に触発されて、生徒に負けないような賢い発言が生まれてくるんです。親の本音で言つたら、「大学に何名入れたか」「大学入試に対応できる授業をやつてほしい」とか、そこからが本音なんだけどなかなかそういうレベルの意見が言えなくなつてくるという討論のダイナミズムといったものが発揮されました。

「シンポジウムはやつたけどそれが実際の授業改革にどこまで結びつくか、それに向けての展望を出したい」と生徒自身が主張し、完全に生徒主導型になつています。我々教員というのはあとから追つかけていけばいい。失敗したら大人として責任とつてやればいいわけですから。ともかく生徒がどこまでも教育の表舞台の中核に座るような授業改革を中心に据えた教育改革、そして学校改革を可能な限り追及していくたい。また、たとえば生徒の発言が学校運営に直接反映されるとか、あるいは父母が学校運営に参加するとか、そういう制度面での民主化というところまでは残念ながらうちの学校は実現して

いません。学校を構成する父母や生徒や、我々教員の意識はフォーマルな組織の様々なしぱりの中ではがんじがらめで動けないんですが、現実として、それを認めざるをえません。外の力も大胆にかりて運動のつくり出す躍動的なムードのなかで、結果として制度の改革等に結びついていければいいんではないのかと、漠然と考えています。

以上、述べてきたことはあくまでも中間報告で、これがどういう結果をもたらすかというのはまだまだ今後の力関係次第です。生徒や父母の要求をどちら側がつかむか。進学、進学という偏差値至上主義がつかんでしまうのか、あるいは新しい学校、新しい教育をつくろうという側がつかむことができるのか。そういう意味において、組織戦ではないのかと思つてゐるんです。いずれまたこういうふうになりましたという報告ができればいいなと思つています。



地域から創造する高校生の国際交流

—映画「渡り川」製作にかかわって

高知高教組 山 下 正 寿



幡多高校生ゼミナールの活動
幡多高校生ゼミナールが活動しているのは幡多地区、四十万とか足摺岬のあるところで、ごく普通のいわゆる田舎の地域です。その一つの地域から国際的な運動に関わる国際交流を高校生自身がつくりあげてきた、それはどうしてなのかとということを報告したいと思います。

このゼミナールができたのは一〇年前です。県立学校九校（分校三校を含む）の高校生の自主的なサークルです。毎年四〇名から六〇名ぐらいの規模でやっています。これまで一五〇人ぐらいいの卒業生をゼミナールから出しています。ス

ローガンとしては「足元から平和と青春を見つめよう」ということで、地域の現代史発掘のためのフィールドワークをすすめ、調査し、分析し、それをさらに文化的な表現活動に発展させる活動をすすめています。

運営については役員会で企画して、各学校の代表者会で決め、総会にかけるというかたちですすめています。「ベースウェーブ」というニュースをつくりながら、お互いの情報交換をすすめています。例会は月二回、おもに土曜日、日曜日をおこないます。年間の活動内容は、五月に新入生歓迎会をします。これは自然の豊かなところに新しい会員を誘っていくという活動です。六月には進路ガイダンスということで、

手紙で自分の体験を語る、あるいは直接そこに参加して後輩たちに語つてくれる同時に、地域のすぐれた実践家どとか大学の先生等も迎えて講演会をやっています。
進路については、かなりの生徒が自分の希望する大学とか、福祉関係どとか生協どとか、社会的な活動に参加していきたいということで進路を実現しています。六月から七月にかけては、地域を文字どおり歩いて調査をすすめています。この調査方法はある程度顧問が事前調査をしますけれども、意見の異なるたた対象を選んで調査をして、生徒と教員が対等に参加します。七月下旬から八月にカンパ活動を広げて、いろんな集会とか地域に入っています。市役所や学校訪問や漁協へいつたりしてカンパをしな

がら自分たちのまとめた資料を手渡します。毎年夏に「平和の旅」をおこない、広島、長崎、沖縄、今年は韓国へ行き、新しい地域を知つて交流をすすめていき、核づくりをすすめています。

八月からは帰つて報告集作成ということに入ります。旅をしているときは分担を決め、それに沿つて感想文を書いて自分たちでワープロで打つて仕上げます。九月、一〇月、一一月と各校の文化祭の発表のとりくみをすると同時に、

幡多地区人権・部落問題学習集会という校長会主催の集会があります。ゼミ生はリーダーとして参加し、分科会の報告をしたりして、全体を盛り上げる運動にとりくみます。と同時に、学校代表として全国高校生部落問題研究集会に参加します。

一月の五、六日と合宿をして正月に帰つてくれるOBを交えて交流会を幡多だけでなく全県的に広げておこなっています。また二月には、「平和学校」という自分がほんとに聞きたい授業をつくる活動にも参加しています。それがすみますと、今度は表現活動に入り、演劇が中心ですけれども、自分たちの歩みを濃縮してシナリオをつくり、三月の全県に広がる「高校生のつどい」という集会に発表します。

こういった運動を支える教員は顧問会をつくり、各学校におもに社会科の教員を中心に二名の指導担当教員をおきます。組合に入つて二名の指導担当教員をおきます。組合に入つていない若い人もなかに入つて援助してくれています。全体で一〇人から一五名の顧問団が資料収集と事前調査、そして打合せ会をやつて分析をします。そしてここが軸になつて三年に一回ぐらいの割合で本をつくりあげる作業を行ないます。さらに地域の人々から広く支えていくために幡多地域文化ゼミナール館ができました。

敷地を提供し、建設費の大半を出してくれた素晴らしい人がいました。私のことですけども（笑）。ゼミ生と一緒に倉庫を壊し、ゼミ生のお父さん（大工さん）に頼み、一生懸命つくつてもらいました。

韓国へ一元從軍慰安婦の証言を聞く

二階に舞台と小ホールがあり、一階に事務室をおいて印刷もできるようにし、二階は映画の上映、ビデオの編集ができる機材を入れています。お風呂もあり、生徒が合宿しているんなことができる、いわゆる現代の若衆宿というのをつくりました。「ゼミナール館」友の会が約一八〇人ぐらいいまして、そのメンバーが財政的にも文化的にも支えてくれています。現在は広場に約一〇〇人ぐらいのいわゆる集団労働という子どもづれの家族がきていまして、その子どもたちが小学校に入学するわけです。そのなかにいた国本（李）福順という朝鮮人少女と宮本磨智さんという地元の少女が非常に友情が深ま

り、そういうつながりで生徒たちを支えていくということです。

と同時に、現在は幡多地区には大学があります。セんので、大学づくりの運動を開始しました。何年かかると思いませんけれども、アメリカのコミニティカレッジに似た日本流のコミニティカレッジ、地域に密着した学問体系をもつた大学をめざし、力を結集して向かっていきます。何年かかると思いませんけれども、アメリカの

コミニティカレッジに似た日本流のコミニティカレッジ、地域に密着した学問体系をもつた大学をめざし、力を結集して向かっていきます。何年かかると思いませんけれども、アメリカの

のですが、その宮本さんから当時の話を聞くことができました。皆さん近くの小学校にもあると思いますけれども、学籍簿のなかに、ちょうどこのころのを調べましたら朝鮮名の子どもも、三六名の名前が見つかりました。調査のなかでその少女がどうも広島へ行って被爆して韓国へ帰っているみたいだという話が出ました。広島に行つていろんな団体に聞きあわせてもわからぬので、じや、韓国に行つて調べたいということになり、この夏ソウルへ行きました。

参加者は高校生が一八名（高知一一、広島五、埼玉二）でOB、OGが四名です。教員と映画スタッフが二三名、合計四五名の代表団を韓国に送りました。そのときに元従軍慰安婦のキムファクスンさんに会いました。生徒が事前に「私たちにはなにもできないけれどもあなたのこと

を知りたい、伝えることがあれば伝えたい」という手紙を出していたのです。キムファクスンさんの家を訪ねたのですが、一人がやつと寝れるようなところに住んでいらっしゃったことで衝撃を受けて、彼女の証言を聞きました。非常に目のきれいな穏やかな方なんですが、証言に立つたときにパッと顔色が変わりまして、五分間程の沈黙のあと、一七歳、ちょうど高校生と同じ世代の体験を語りだしました。

この厳しい報告を聞き、生徒たちが最後に感想を求められたんですが、埼玉の鈴木さんというゼミ生が感想を言おうとするのですが、泣き崩れて声が出なくなり、それを補おうとしたゼミ生もまた言葉が出なくなつたんです。キムファクスンさんは、「眞実を知ろうとする皆さん

の姿を見て嬉しい。日本政府は気にいらないが若い人たちに過ちはない。嘘を言わずに正直に生きてください」ということで、むしろ高校生を励ました。こういったことがほんとに民間サイドがやれる交流ではないかと思いました。

韓国の高校生・大学生との交流

こういう調査をしたあとで、韓国の高校生と大学生を訪ね、民主化運動の拠点になつた延世大学をおとずれ、率直な話をすすめました。韓国の高校生との交流でいちばん出た意見は日本の教科書についてです。どういうふうに書いているのか。「あなたの方はそういう教科書で学んでそれを補うためにどういう努力をしているのか」ということを非常に強く聞かれました。そのことについては彼女らも「率直に言つて教科書は不十分だ。自分たちが学んだものと韓国の評価とはずいぶん違う」と。しかし韓国側もやはり書きすぎている面もあるかもしれない。これは政府が意図的に反日感情を強めれば政権が安定するということでやつてきた面もあるということで、教科書のありかたについても率直な意見がかわされ、討議がすすめられました。

くれました。そのことを見て高校生たちは、こ
ういうふうに感想に書いているんです。「ある
レリーフの前で説明を受けていたときに一人の
男性が突然どなりはじめた」とあります。

通訳さんのお話から反日派の方だとわかりまし
たが、日本が今までしたことから考えればそ
れはすごく自然なことだし、どなられたことに
よつて逆に心が引き締まる思いでした」と書い
ています。

もう一人の生徒は、「男の人が私たちにくつ
てかかってきたとき私は内心安心した。いまま
で会つた人たちは日本が昔したことを見たもの
せいと責めることもなく優しく気を使つてくれ
ていた。だから心のなかではこれは韓国の一員
であつて全部ではないという思いが私に少し居
心地の悪さを与えていた。パコダ公園で怒つて
いる人に会つて、やつとすべては終わつていな
いんだと実感できた」。なんと冷静に書いてい
るんでしよう。

こういった交流のなかで延世大学生が最後に
あいさつで、「日本の高校生が平和と歴史を学
びに来るといつてもほんとは遊びじゃないかと
思つていて。しかしまそれは違うと断言でき
る」と言つています。交流を通じて本当に真剣
に学びにきてくれたんだという思いがお互いに

伝わりあつた。短い期間ではありましたがれど
も、そういう交流の糸口ができたということです。

帰つてきてからも彼らはまたすぐに手紙を出
して、やつぱり理解するためには自分たちがハ
ングルの文字をわからなければいけないという
ことからそういう勉強を始めています。そして
一人のゼミ生はこれを皆に伝えたいということ
でNHKの青春メッセージに参加し、中・四国
大会で発表しました。また、竜馬賞（高知県の
報道一一社が竜馬の志をつぐ青年の団体に贈
る）という賞をもらいました。三〇万円の副賞
がありまして、これをどうするかということを
生徒に相談したら、このお金をもとに韓国の高
校生を呼びたいという提案がなされました。よ

し、それなら自分たちだけじゃなくて全国の高
校生に会わせたらどうかという話をすすめてい
ます。こうした国際交流活動は、ドキュメンタ
リー映画「渡り川」として、高校生の自己成長
の姿を記録し、三月から全国で上映がはじまり
ます。

教育運動と高校生の自己成長の課題

最後に私は今年度から組合役員として出まし

たから教育運動と高校生の自己成長の課題につ
いて触れます。

高知高教組は勤評反対闘争ではげしい弾圧と
分裂攻撃をうけて、四〇〇人を切る程大きく後
退した時期がありました。組合に対する攻撃と
ともに、高知県生徒会連合（高生連）に対する
三校交流禁止を中心とした破壊攻撃がされまし
た。当時高生連は、一九〇〇名の県下の高校生
を組織し、知事交渉をする力量をもち、勤評・
安保・学テ問題に自主的にとりくむとともに、
各学校の生徒会活動の交流や文化的行事などに
とりくんでいました。この高生連が崩壊したこ
とによつて、各校の生徒会活動が後退し、自淨
能力を失つた高校では、暴力事件をはじめとする
非行問題や低学力問題が生じてきました。

高教組運動も全体として受け身のたたかいが
主となる時期がありました。運動のあり方に
ついての討論の中から、「高校生を主体とした
学校づくりにとりくむ」活動を大きな柱とする
ようになりました。それは、組合活動が権利中
心主義的なたたかいに比重をおきすぎると、教
育を創造する喜びを得るという教育労働者の本
質的要請を低下させる場合がある。そうすれば
若い教職員に魅力のない組合となり、組織とし
ての質的な発展がおこらないというところ方で

した。しかし、昔の高生連をそのまま復活するのではなく、冷静に総括し、基本的に教育基本法にうたう「平和的な国家及び社会の形成者として真理と正義を愛し」「自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民」づくりをめざす高校生の自主活動を育てることを確認しました。

一九七五年の高生連崩壊後、一三年ぶりに県下の高校生四〇〇名が集まつた高知県高校生討論集会（現「高校生のつどい」）が開かれ、高校生の自主活動が再生されはじめました。高校生の生き生きとした姿を見、各校でクラブやクラス、生徒会行事の充実にとりくむ青年教職員が増えました。このとりくみの中で高教組青年部を中心として、活動がみずみずしいものとなり、組合員の拡大へと結びつきました。組合員の増えた学校では、学校づくりと結びついた活動が芽生え、自主活動が全校的にひろがりをみせてきました。一方で組合員の多くなった学校でなれい、もたれいになり、高校生の自主活動を軽視した職場は軽氣を失い、組合の結集も弱まり、後退しました。

高校生の自主活動がどれほど高まつてゐるかは、教育運動の質をはかるパロメーターであり、教育運動の総合的結集が高校生の自主活動の発展に結びつくべきだと思います。そうしなけれ

ば、日本全体の高校生の人格的成长がとどまり、

できるよう发展するでしょう。

日本の民主主義的發展にとつて大きな空白をくることになります。最も多感で視野の拡がる高校生時代に、受験競争のために人格的成长を先おくりにすることが、青年の社会的参加を遅らせています。これほど、汚職・腐敗政治がつづいてもなお政治の民主化がすすまない背景には、青年の政治的不参加も一因となっています。

また、全国の民主主義的な運動にとつても、青年の主体的参加の後退の中、後継者が育ちにくく、運動の未来にまでかかわってきています。高校の教育運動は全国的な民主主義運動の中で、政治的、社会的教養をもつた青年の育成という課題に最も大きな責任をもつてゐると思ひます。

全国には、地域の自主的な高校生セミナーが広がりつつあります。また、愛知県のような地域での高校生フェスティバルやセミナーもひろがろうとしています。高校生たちは、管理教育を克服し、自治を与えるべく創造的に表現し、参加し、改革する力をもつてゐることを示しています。現在のところは、学校外の活動が主となつてゐますが、この活動を質的に高めるようになつていけば、学校づくりに結びつき、とくにホーム、文化部活動や授業、行事への参加が

運動全体の中で位置づけるとともに、顧問の体制づくりや活動の財政的援助、社会教育活動としての保障などについて整備させていくことが課題となつています。

日高教・全国私教連の自主活動を教訓化し、地域の教育・文化共同運動として发展させていけば、高校生の新しい自主活動のうねりが全国にひろがっていくことをいくことを確信します。



集会のまとめ

全国私教連 教文部長 伸本正夫

報告と討論から明らかになつたいくつかの点についてふれたいと思います。

日高教と全国私教連が共催して二年目を迎えた今年の高校教育シンポジウムは、公立・私立の連携・共同を前進させ、高校（教育）再編の動向とねらいを明らかにするとともに、憲法・教育基本法と「子どもの権利条約」にもとづき、学校五日制を視野に入れ、生徒の発達段階に応じた高校教育を創造するための課題を明らかにすることを目的にして開かれました。参加者は日高教から二三組織一二名、顧問二名、本部八名の合計一二三名、全国私教連からは九県及び本部の合計三九名、日高教以外の公立高校組織からは五県二市から一四名、全教本部から二名、研究者六名の总数一八二名でした。

全体集会では太田政男氏が「高校再編の本質・現状とめざすべき高校教育改革の方向」と題して記念講演を行い、「現実をつかみ、現実をつくりかえながら制度的展望をはかる」との立場に立つて、

「知と学びの転換、国民的共通教養論の再構築、父母・地域住民が

学校づくりに参加していくすじみちをつけること」など高校教育の

創造をめぐる今日的な課題を明らかにし、「まもる」ということは創造の主体としての自覚が欠けており、守勢にたつていてことだ」との木下順二氏のことばを引用し、研究と実践の創造的なとりくみの重要性を強調しました。

その後、三つの分科会にわかれ実践の交流と討議が行われ、大きな成功をおさめました。以下、今次シンポジウムの課題に即して、

1. 報告や討論から明らかになつた重大な点の一つは、今日の攻撃の特徴です。それは、新学力観による観点別評価の強行や人格の点数化、芸能科や総合学科などの多様化、学区制や入試制度の改悪など、教育の内容面から制度面にわたつて全面的なもので、しかも非常に急テンポに回答無用の一方的おしつけや強行突破という手法ですすめられています。このため、人格まで含めた競争がますます激化し、教育困難を加速させていることです。愛知では、複合選抜制度を契機にして、特定の学校で退学者が激増し、16→5もできないような低学力生徒の増加、授業の不成立など深刻な事態に直面しています。

2. 教育困難校の克服のとりくみについては、深い討議がおこなわれました。

全国的にみるとまず教育困難校が集まつて話し合い、解決の糸口をつかもうとしているところに特徴があります。愛知の場合には、現状とその分析をするだけでなく、それを分かりやすい「教育困難校白書」として発行して問題を社会的に提起していることが注目され

ました。低学力の克服については、一九七〇年代から「マラソンテスト」や「級制度」などのたちで「教育は死なず」で有名な長野の私学の学校ぐるみのとりくみなどがありました。この教師集団によるドリルを中心としたとりくみは、当初は成果があがつたにもかかわらず、結局壁にぶつかり停滞してしまいました。これに対して、今回、参加者に大きな感動を与えた京都・朱雀高校の「新学力観の克服、職場ぐるみでわかる授業を」の実践報告は学校ぐるみで日常の授業そのものにとりくんだものでした。

この実践報告を受けて、長野・箕輪工業高校の参加者からこれまでのとりくみを実践的に総括する感動的な発言がありました。箕輪工業高校は、一七年にわたって、「国・数・英はすべての教科の基礎だからすべての教師で狙い、この基礎学力には不合格はありえない」と位置づけて、学校ぐるみのとりくみをしてきたものです。しかし、それは、必然的に一つの壁にぶつかりました。同校では、例えば、 $3a - a = 3$ なぜ間違っているのか」とまで指導しようとすると、とても一五分ではできず、満足のいくように学力補充ができなかつたからです。しかも、一方では、機械科等では、すでに低学力であることをみて、どうやって授業をしたらいいかを考えて実践をすすめるようになつてきました。このような現実をふまえて、「実践的にもスタート時点での目算がはずれてきて、結局、低学力は授業の中で克服していく」ということになつてきました。

これは、愛知の教育困難校の克服に関しても一つの示唆を与えるのですが、共同研究者からは、学区を縮小することやアカデミックな教育課程をくみかえて、総合講座など生徒の興味や関心を喚起

する授業づくり、父母や地域との共同などを切り口にしていつはどうかという発言がありました。

3. 新学力観にもとづく観点別評価に関しては、態度を評価すべきでないとする京都・朱雀高校の実践と「新学力観の態度重視は生徒の学習内容の理解と関係なく【態度】を評価するもので生徒の学力保障を放棄するものであるが、生徒の学習理解と学力保障のためになるなら授業態度を評価に加味すべきだ」という埼玉の報告とに意見が分かれました。

京都・朱雀高校の実践は、「相対評価の評価額が、授業改善を曖昧にし、新学力観がはいりこむ隙をつくっている」として、「学力形成と学習への関心・意欲を統一させる理論と実践をすすめる到達度評価の立場から「態度は評価にいれない」という明確な立場を示しながら、「わかる授業をつくる」とりくみを報告したものです。態度を評価すべきかどうか、評価するとしたらその評価のしかたはどうあるべきか、今後さらに実践的にも検討を深めていくことが求められます。今回の討議は、この態度の問題が、もつばら居眠りとか私語など授業態度にポイントがおかれていましたが、態度というものをもつと別の角度からとらえることが必要なではないでしょうか。今後の検討に関連して、日高教『教文ニュースNo.2』に掲載されている、『新学力観の誤り、混乱を克服するための資料』として森田俊男氏から提供されたユネスコの「平和をつくり、になう新しい市民へ」においては、「教育の目標」は、「知識、態度、価値、技能の概念で表現されるだろう」とまとめていることに十分注目していきたいと思います。

4. 履修・修得問題については、基調報告で「履修と修得を切り放し、すべての科目で修得の枠をはずし、「まじめ」に履修して八〇単位さえとればよいというのは基礎学力を身につけさせる教育を否定し、態度主義を生徒たちに押しつけるもの」と批判し、分科会の報告でも、「必修科目まで修得科目からはずすことは公教育の役割から大きく逸脱している」との意見がだされました。私もそのように思つてきましたが、来年度から履修と修得の二つの単位認定方式にふみだすある高校のとりくみを聞いて、自分が『履修と修得の切り放しイコール基礎学力放棄・態度主義の押しつけイコール悪』という図式からしか見ていなかつたのではないかということを反省しました。その高校では、卒業認定単位は八〇単位とし、国語Ⅰのような必修科目についても、履修・修得する場合と2／3以上の出席を条件にして履修だけになる場合の二つの単位認定のケースがおきることを想定していますが、画一的・形式的なものはできるだけやわらかなものにし、選択制を大幅にとりいれ授業を刷新するなどして、授業内容で勝負する方向に踏み出そうとしているそうです。つまり、履修と修得の切り放しについてはさまざまな問題が明らかにされていますが、そのことが単純に「意欲・態度がよければそれでよし」という態度主義に帰着すると一面的にきめつてしまつては、それが持つている可能性を全面否定してしまうことになるのではないか、したがつて、新しい角度から教育課程や教育内容や授業改善と合わせて、この問題をさらに深めていくことが必要なのではないかでしょうか。

報告でも、「必修科目まで修得科目からはずすことは公教育の役割から大きく逸脱している」との意見がだされました。私もそのように思つてきましたが、来年度から履修と修得の二つの単位認定方式にふみだすある高校のとりくみを聞いて、自分が『履修と修得の切り放しイコール基礎学力放棄・態度主義の押しつけイコール悪』という図式からしか見ていなかつたのではないかということを反省しました。その高校では、卒業認定単位は八〇単位とし、国語Ⅰのような必修科目についても、履修・修得する場合と2／3以上の出席を条件にして履修だけになる場合の二つの単位認定のケースがおきることを想定していますが、画一的・形式的なものはできるだけやわらかなものにし、選択制を大幅にとりいれ授業を刷新するなどして、授業内容で勝負する方向に踏み出そうとしているそうです。つまり、履修と修得の切り放しについてはさまざまな問題が明らかにされていますが、そのことが単純に「意欲・態度がよければそれでよし」という態度主義に帰着すると一面的にきめつてしまつては、それが持つている可能性を全面否定してしまうことになるのではないか、したがつて、新しい角度から教育課程や教育内容や授業改善と合わせて、この問題をさらに深めていくことが必要なのではないかでしょうか。

5. 今次シンポジウムでは、東京・北海道・岡山・大阪などから、とりわけ高校生が「子どもの権利条約」を自らのものにしていくとおりくみを励ます質の高い実践が報告され、参加者に大きな確信を与えるものとなりました。

例えば、東京・和光高校の「学校五日制とカリキュラム」「五日制は生徒とともにー」の報告では、隔週学校五日制の意義を検討し、もつとも影響を受けるのは生徒だとして、生徒自身が考えて判断すべきであるとの立場から、生徒が真に自立していくためには、学校だけが自分の生活と考えがちな生徒たちに、学校を「相対化」させ、社会や家庭にも視野を広げ、現実世界と直接きりむすばせていく必要があること、そのためには時間的な保障が必要であることを明らかにしてこれを提起したのです。

そして、生徒とともに学校五日制をつくっていくとはどういうことか、生徒に決定権があるのか、生徒の意見表明をどう保障するのか、隔週五日制に対する賛否だけが参加か、隔週学校五日制協議会の構想（生徒、教師）と生徒会への申し入れ・発足、意見表明の方法（アンケート、学級討議、トーク集会、投票等）などの本格的な検討を行つてることが大きな特徴です。

このとりくみはまさに子どもが学校をつくる主体として本格的に意見表明し、参加した画期的なとりくみであり、「子どもの権利条約」を学校の場にどのようにいかしていくのかということをきわめて分かりやすく教えるものとなっています。

また、千代田高校の「生徒の現状から出発した平和の教育とは」の報告は、教師の大きな自己変革を土台にして、平和教育のあり方を総括しつつ、「低学力を克服し、確かな学力を保障することなし

に平和の学力は語れない」と生徒の学習観の変革をめざして、生徒会やクラスのとりくみをはげましていくとりくみです。生徒たちはホームルームで各教科に対する要求をまとめ、生徒会の代表が教師と「団交」するまでになつていきます。この中で、生徒がこんなにも勉強をわかりたいと思っている自分たちに感動し、教師の必死の努力を知り、それに応えなくてはというように人間への信頼を回復していきます。

このように生徒の自主的活動が、自らの学習要求そのものと結びついて発展していることは、意見表明権や参加など「子どもの権利条約」を授業や学習にいかすとはどういうことかということとかわって大変注目されます。

6. 最後に、実践報告や討論を通して、新学習指導要領や入試制度や学区制の改悪など高校再編の急テンポの攻撃をはねかえしていく上で、私たちのたたかいが、父母・地域との共同を発展させることの重要性がいつそう明らかになりました。現在とりくまれている公私共同の三五入学級実現・私学助成増額等の全国三千万署名運動も大きく成功させていきましょう。今次シンポジウムは公私共同二年目にふさわしく充実した内容で大きな成功をおさめることができましたが、今後、いつそう父母・地域との共同、公私共同を前進させて民主的で豊かな高校教育を創造させていくためにがんばりましょう。以上でまとめを終わります。

